

東京国立文化財研究所要覧 : 1970

出版年月日	1971-09-20
URL	http://doi.org/10.18953/00008567

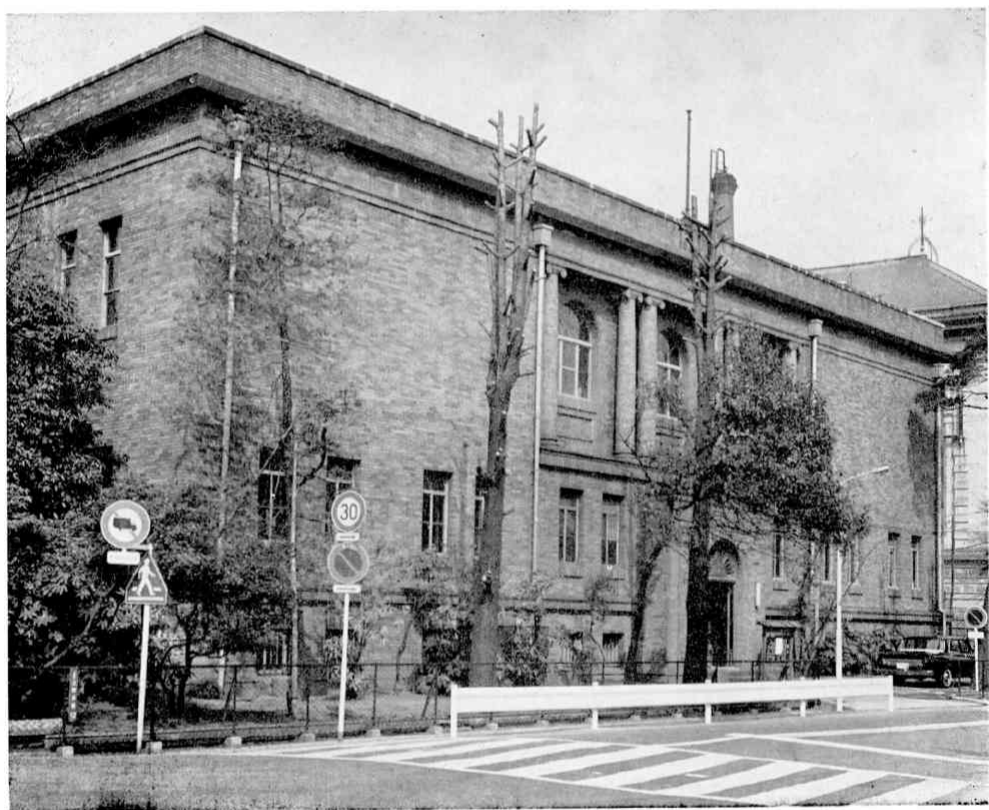


東京国立文化財研究所要覧

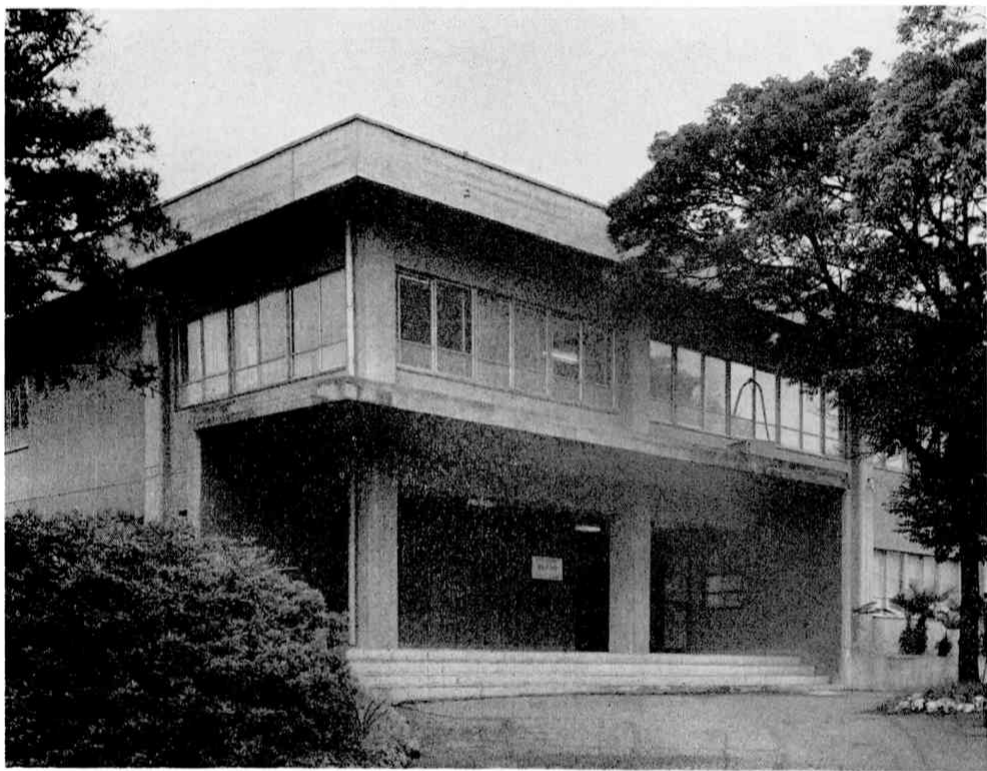
1970



昭和45年度



東京国立文化財研究所本館



東京国立文化財研究所保存科学部実験室



東京国立文化財研究所別館

東京国立文化財研究所建物所在図



目 次

I 沿 革	1
1 設立の経緯	1
2 年 表	1
3 歴代所長	4
II 設立目的と機構	6
1 機 構	6
2 職種別予算定員	7
III 土地・建物	8
1 敷地・建物の面積・構造一覧	8
2 建物の平面図	9
IV 予 算	13
1 歳出予算	13
2 科学研究費補助金交付決定額	13
V 研究活動及び事業	14
1 研 究 活 動	14
(1) 美 術 部	14
A 研究・調査活動の概要	15
B 研究題目	16
C 研究・調査活動	23
D 主要研究業績	30
E 科学研究費題目	35

(2) 芸 能 部	35
A 研究・調査活動の概要	36
B 研究 題 目	36
C 研究・調査活動	40
D 主要研究業績	42
E 科学研究費題目	44
(3) 保存科学部	44
A 研究・調査活動の概要	45
B 研究 題 目	47
C 研究・調査活動	51
D 主要研究業績	57
E 科学研究費題目	60
F 受 託 研 究	60
2 事 業	61
(1) 出 版	61
A 美術 研 究	61
B 日本美術年鑑	62
C 音 盤 目 録	62
D 保 存 科 学	62
E その他の出版物	63
(2) 公開学術講座	66
(3) 開所記念日行事	68
(4) 国際国内関係	69

VI 研究施設・設備	71
1 蔵 書	71
2 資 料	71
3 機 器 ・ 設 備	72
4 黒 田 記 念 室	75

5 閱覽室.....	76
------------	----

VII 職員	77
--------------	----

1 現職員.....	77
------------	----

2 旧職員.....	78
------------	----

VIII 関係法規	81
-----------------	----

I 沿 革

1 設立の経緯

本研究所は、昭和27年4月1日発足したのであるが、その前身であり母胎となったものは、昭和5年に創設された帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、故帝国美術院長子爵黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行なうべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原隼二郎および東京美術学校校長正木直彦とはかって諸方面の意見を徴し、またわが国美術上の必要に照らして次の事業を行なうこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立のうえは一切これを政府に寄附すること。

2 年 表

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が設置され、東京美術学校校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業について東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列について東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二および大給近清、建築造営について東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務について遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192m²の建物1棟を起工した。

同3年9月 前記の建物が竣工したので、美術研究所開設のため必要な備品・図書・

写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作品を陳列した。

同4年5月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同5年6月28日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同年10月17日 美術研究所開所式を挙行了た。

同7年1月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同年4月18日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5ヶ年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同年5月26日 帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行なうことになった。

同9年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129m²の書庫が竣工した。

同年4月「日本美術年鑑」の編纂事務を開始した。

同年6月1日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年2月12日 木造、平家建、延面積97m²の写真室1棟が竣工した。

同19年8月10日 黒田清輝の作品、ならびに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同20年5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目日本間家倉庫3棟に疎開した。

同年7月～8月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市内牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之

丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同年4月16日 東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開中であった黒田清輝作品ならびに写真原版の引揚げを完了した。

同22年5月3日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

同24年 本年度から科学研究費により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年8月29日 文化財保護法の制定に伴い、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同26年1月31日 美術研究所組織規程（昭和26年文化財保護委員会規則第5号）が定められ第一研究部・第二研究部・資料部、庶務室が置かれた。（昭和25年8月29日から適用）

同27年4月1日 東京文化財研究所組織規程（昭和27年文化財保護委員会規則第4号）が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

同年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。

同28年4月26日 保存科学部研究室は、国立博物館保存修理課保存技術研究室として昭和22年発足以来、東京国立博物館地階の1室に置かれていたが、同館構内の倉庫132m²を改造のうえ移転した。

同29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和29年文化財保護委員会規則第1号）、東京国立文化財研究所となった。

同32年3月28日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄鋼モルタル塗、平家建、8m²の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同年11月30日 従来の2階建書庫のうえに更に1階を増築3階建とし、増築分延面積71m²が竣工した。

同34年4月30日 国立文化財研究所研究受託規程（文化財保護委員会告示第14号）が

定められ、この年度から受託研究が開始された。

同36年9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和36年文化財保護委員会規則第1号）、従来の庶務室は庶務課となった。

同37年3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎として、鉄筋コンクリート造2階建延面積663m²の建物1棟が竣工した。

同年7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和37年文化財保護委員会規則第1号）、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同年7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工に伴ない、旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年6月15日 文部省設置法の一部が改正され（昭和43年法律第99号）、本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1,950.41m²）の起工式が行なわれた。

同45年3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行なわれた。

同45年4月22日 芸能部は、別館3階に移転した。

同45年5月8日 保存科学部は、別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を終った。

同45年6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が終了した。

同年11月2日 所長および庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した。（本館は、美術部庁舎となる。）したがって研究所の所在地表示は「12番53号」を「13番27号」と変更された。

3 歴代所長（昭和5年～昭和45年）

主事	正木直彦	（昭和5.6.28～昭和6.11.25）
主事	矢代幸雄	（昭和6.11.25～昭和10.6.1）
所長事務取扱	和田英作	（昭和10.6.1～昭和11.6.22）
所長	矢代幸雄	（昭和11.6.22～昭和17.6.29）

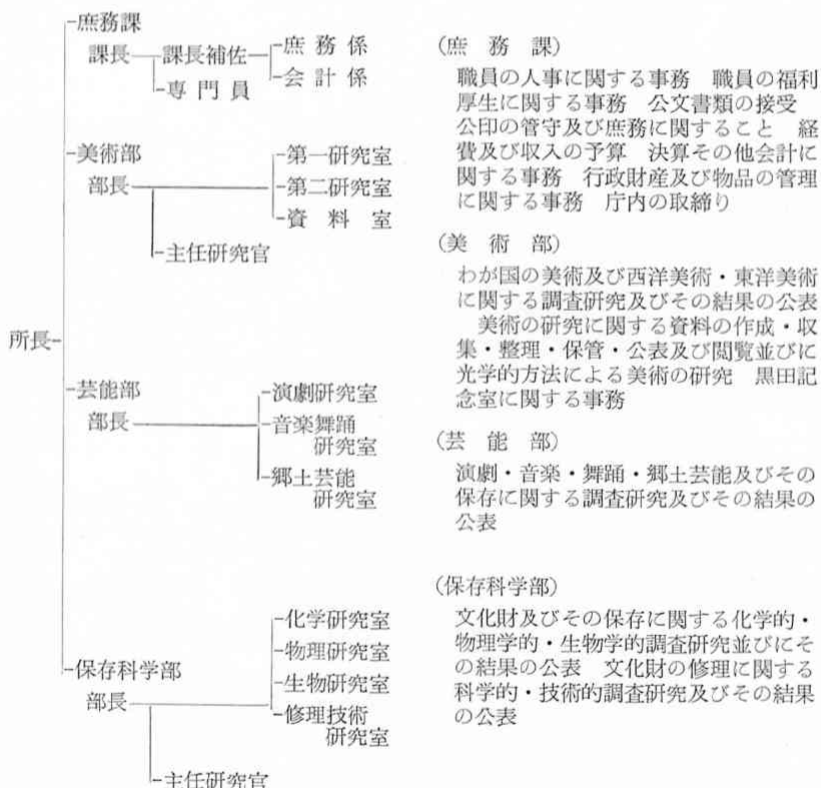
I 治 革

所長事務取扱	田	中	豊	蔵	(昭和17. 6. 29～昭和22. 8. 16)
所 長	田	中	豊	蔵	(昭和22. 8. 16～昭和23. 5. 11)
所長代理	福	山	敏	男	(昭和23. 5. 11～昭和24. 8. 31)
所 長	松	本	栄	一	(昭和24. 8. 31～昭和27. 4. 1)
所長事務代理	矢	代	幸	雄	(昭和27. 4. 1～昭和28. 11. 1)
所 長	田	中	一	松	(昭和28. 11. 1～昭和40. 4. 1)
所 長	関	野		克	(昭和40. 4. 1～ 現 在)

II 設立目的と機構

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行なうことを目的として設立された文化庁の附属機関である。その機構等は次のとおりである。

1 機 構



2 職種別予算定員

区 分	44 年 度	45 年 度
指 定 職	1	1
所 長	1	1
行 政 職 (一)	14	13
課 長	1	1
課 長 補 佐	1	1
係 長	2	2
専 門 職	2	2
一 般 職 員	8	7
行 政 職 (二)	2	2
守 衛	1	1
自動車運転手	1	1
研 究 職	31	32
部長等研究員	6	8
室長等研究員	7	6
研 究 員	17	18
研究補助員	1	—
合 計	48	48

Ⅲ 土地・建物

本研究所の主な建物は、東京都台東区上野公園12番53号所在の本館と、上野公園13番27号所在の保存科学部実験室および別館である。

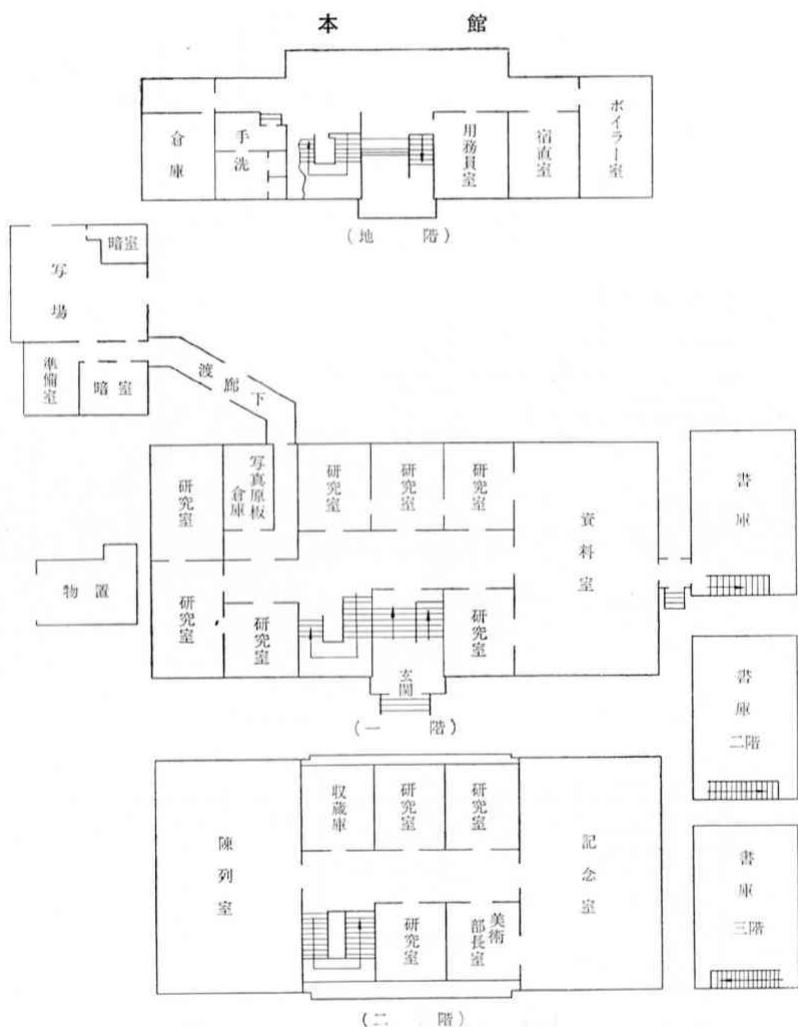
土地は、本館の敷地 1,457m² であって保存科学部実験室および別館の敷地は、東京国立博物館から借用している。

なお、建物の面積・構造等は、次のとおりである。

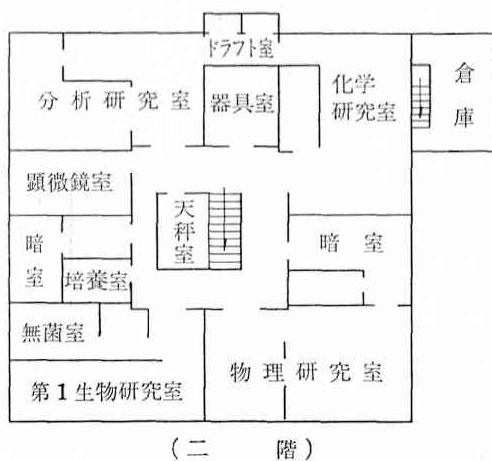
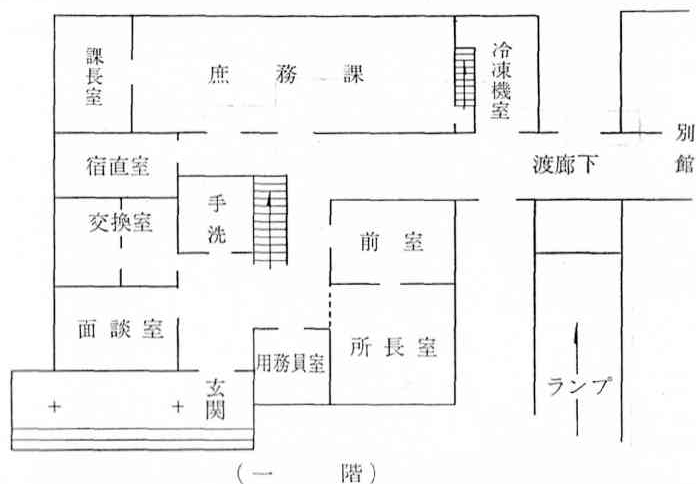
1 建物の面積・構造一覧

No	名 称	種目・構造	建面積 延面積	建 年 月 日	No	名 称	種目・構造	建面積 延面積	建 年 月 日
1	本 館	事務所建 RC. 地上 2階・地下 1階	m ² 468.26 1,192.72	昭 3.8.30	6	渡 廊 下 (写場)	雑 屋 建 木造平家	m ² 20.26 20.26	昭 13.3.25
2	書 庫	倉 庫 建 RC. 3階	64.63 201.80	" 10.1.25 (32.11.30) (3階増築)	7	車 庫 (現物置)	"	27.96 27.96	" 15.9.11
3	渡廊下 (書庫)	雑 屋 建 RC. 平家	4.13 4.13	" 10.1.25	8	保存科学 部実験室	事務所建 RC. 2階	338.41 684.91	" 37.3.28
4	写 場 及 第1暗室	雑 屋 建 木造平家	62.80 62.80	" 13.1.8	9	別 館	事務所建 RC. 地下 1階地上3 階塔屋付	462.75 1,950.41	" 45.3.25
5	準備室及 第2暗室	"	35.12 35.12	"	10	渡 廊 下 (別館)	雑 屋 建 鉄 骨 平 造 家	27.60 27.60	"

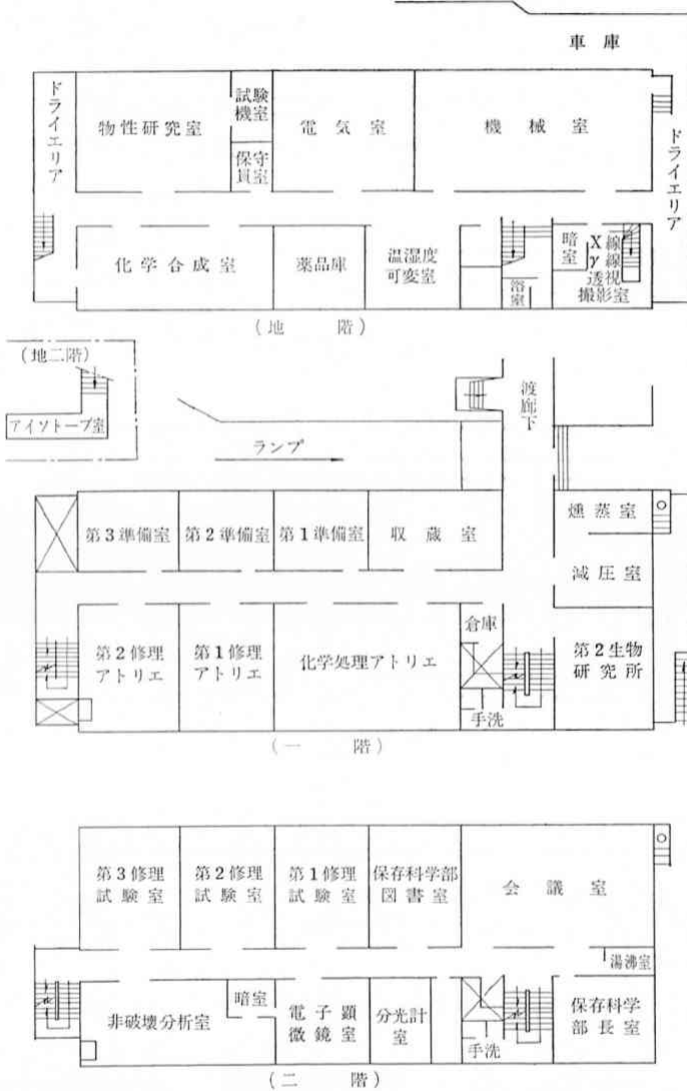
2 建物の平面図 (各庁舎の縮尺不同)

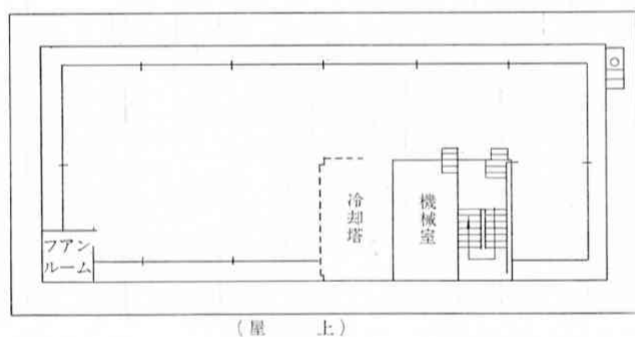
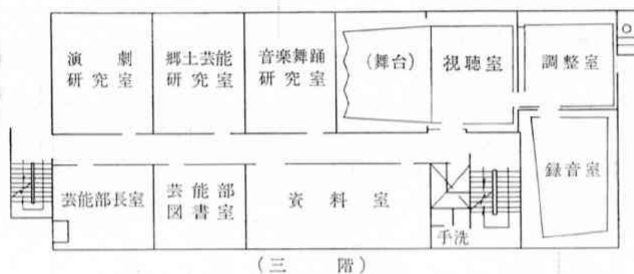


保存科学部実験室



別 館





IV 予 算

1. 歳出予算

(単位千円)

区 分	人 件 費	事 業 費	施設整備費	合 計
昭 和 44 年 度	70,015	30,648	※146,331	246,994
昭 和 45 年 度	85,060	41,053	27,019	153,132

※ 別館延 1,950.41m² の建築費を含む

2. 科学研究費補助金交付決定額

(単位千円)

区 分	一般研究		奨励研究		総合研究		合 計	
	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額
昭 和 44 年 度	3	720	1	100	2	2,500	6	3,320
昭 和 45 年 度	7	3,000	2	210	2	2,500	11	5,710

昭 和 45 年 度 内 訳

研 究 題 目	研究者	金 額	摘 要
日本肖像画の基礎的研究	宮 次男	千円 1,100	一般研究 B
大陸との関係における古代絵画史料としての文様の研究	江上 綏	700	一般研究 C
中部地方の古代彫刻史の研究	久野 健	550	" C "
沖縄の舞踊技法とその分析研究	三隅治雄	140	" D "
歌舞伎演技譜の研究	浦山政雄	150	" D "
狩野芳崖と明治初期絵画	関 千代	160	" D "
緊急発掘時に於ける出土鉄製品の保存処置	岩崎友吉	200	" D "
考古学資料の不接触精密複製法	石川陸郎	120	奨励研究 A
近松周辺の浄瑠璃作者の研究	宮本端夫	90	奨励研究 A
日本 16, 17 世紀に於ける絵画と工芸との相関性の検討	中川千咲	1,300	総合研究 A
南北朝を中心とする日本中世美術の形成過程の研究	川上 涇	1,200	総合研究 A

V 研究活動及び事業

1 研究活動

(1) 美術部

美術部は日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術とこれらに関連のある西洋美術についての基礎的調査と専門的研究を行ない、その成果を公表するとともに、美術に関する研究資料を作成、収集、整理し、これらの資料を一般研究者の利用にも供し、美術の学術研究のための資料センターの役割も果している。現在3室に分かれ、古美術関係は第一研究室、近代・現代・西洋美術関係は第二研究室、資料関係は資料室が担当する。

調査研究は美術部3室所属研究員の専門領域を中心として実証的に進められているが、学界現下の動向を把握するとともに将来の趨勢を洞察し、方法においても成果においても、基礎的・先駆的役割を果して、広く永く学界に寄与すべく努めている。そのため重要な問題に関しては共同研究を行ない、また当部独自の光学的・化学的研究法を活用し、すでに多くの成果を収めた。

これら業績は当部の機関誌「美術研究」（昭和7年創刊、年6冊発行）に発表し、大部の成果は随時単行の研究報告書として刊行する。また毎年のわが国美術界全般にわたる動向を調査し、客観的資料の提供を主眼として、「日本美術年鑑」を編纂発行している。

研究資料の収集・作成などに関しては、当部の前身たる美術研究所として発足以来、調査研究とともに力をそそいで来たが、現在それらの資料の蓄積も多く、部外研究者広く海外の研究者のため、あるいは文化財関係の事業等のためにも大きな寄与をしている。作成保有する資料公表の一として、定期的には毎年、日本・東洋古美術ならびに近代・現代・西洋美術に関する雑誌論文および単行図書を分類集録した文献目録を編纂し、「日本美術年鑑」に掲載している。古美術関係文献についてはさらに増補訂正を加えて一定の年次をまとめてすでに数冊刊行したが、今後もこれが継承に努めたい。

V 研究活動及び事業

以上のほか、調査研究成果を簡潔に整理した形で公表するため、毎年1回公開学術講座を開催している。

また当部の黒田記念室は、美術研究所設立のため遺産と遺作を寄付した黒田清輝の作品および関係資料を保管しているが、毎週1回一般に公開している。

A 研究・調査活動の概要

○45年において行なった共同研究に関しては43年度から継続実施していた第一研究室及び資料室員の共同による文部省科学研究費総合研究「平安時代における浄土教美術の総合的研究」は本年はじめにも京都国立博物館、知恩院所在の浄土教関係絵画などの調査を行なった。本研究は開始以来貴重な資料と多くの知見を得たが、一応3月をもって主題に関する研究班の組織を解いた。

○文部省科学研究費総合研究「南北朝を中心とする日本中世美術の形成過程の研究」は資料室及び第一研究室員の共同にて前年度より引続き行ない、本年は正木美術館所蔵の中国絵画、日本中世絵画、中国及び日本の書蹟などを中心に調査研究を進め多くの成果を得たが、46年3月にて研究班は一先ず解くことにした。

○45年度よりは新たに文部省科学研究費総合研究「日本16・7世紀に於ける絵画と工芸との相関性の検討」(代表者中川美術部長他所内6名、所外11名)を各室員共同にて実施した。画家と工芸家の生活環境の比較及び交渉の文献的考察、絵画及び工芸の手法・デザインの関連性の検討、宗達派における絵画と工芸、風俗画に見られる染織その他工芸品の研究、絵画及び工芸の各分野に見られる南蛮モチーフの比較の分担課題のもとに調査研究を進めた。その結果、日光東照宮の大妻戸蒔絵、京都高台寺霊屋内陣の蒔絵、滋賀都久夫須麻神社本殿の調査によつて、それらと絵画の関連性などについて多くの新たな知見を得た。また東京芸術大学所蔵光悦筆宗達派下絵謄本、松坂屋他所蔵の小袖雛形、徳川美術館蔵の染織品、神戸市南蛮美術館の初期洋風画、工芸品などの調査により、主題の解明に関してのいろいろ貴重な資料を得た。

○第二研究室全員によって44年度より4カ年計画にて行なっている特別研究「日本近代美術の発達に関する明治前期、中期の基礎資料集成」は前年度に引続き、当時の新聞その他の刊行物あるいは関係者の書簡、作品等について調査を進め基礎的資料の蒐集につとめた。

○各研究員の調査研究，2，3名による共同研究及び他機関，大学における科学研究費総合研究への参加などに関しては各自の研究調査活動の項を参照されたい。

○各個ならびに共同研究の成果は，大体45年度発行の「美術研究」，当部の研究会にて発表しているが，「美術研究」は本年度には267号から274号に至る8冊を発行した。なお成果は他の学術誌，学会などにおいても公表している。

○第二研究室を中心とする現代美術の動向調査は経常的事業であるが，44年の結果を「日本美術年鑑—昭和45年版—」として刊行した。

B 研究題目

中 川 千 咲（美術部長）

〔Ⅰ〕 近世工芸意匠に関する研究

江戸時代初期を中心に陶芸及び漆芸の意匠に関する調査研究

〔Ⅱ〕 近代陶芸の調査研究

明治大正期における陶芸界の動向を中心としての調査研究

〔Ⅲ〕 南北朝陶甕の基礎的整理

科学研究費総合研究「南北朝を中心とする日本中世美術の形成過程の研究」の分担課題として44年度より行なう。

〔Ⅳ〕 日本16，7世紀における絵画と工芸との相関性の検討

昭和45年度科学研究費総合研究A，代表者として所内6名，所外11名にて研究班を組織し主題に関し調査研究を行なう。

久 野 健（第一研究室長）

〔Ⅰ〕 平安初期彫刻の研究

日本各地に分布する平安初期彫刻を広く精査し，諸遺品の様式的関係と技法・流派等を明確にする。また天平彫刻と平安初期彫刻との関係を考察する。

〔Ⅱ〕 鎌倉初期彫刻の研究

鎌倉時代初期の仏像の諸遺品を調査し，鎌倉新様式の発生を明かにし，あわせて運慶様式の成立について研究する。

〔Ⅲ〕 中部地方彫刻の研究

V 研究活動及び事業

中部地方に散在する古彫刻を精査し、その東国的性格を明かにする。また、中部地方の西よりの諸地方の遺像と中央彫刻との関係を考察する。

〔Ⅳ〕 光学的方法による日本彫刻の調査研究

X線 γ 線等を利用した光学的方法により、わが国の飛鳥時代から鎌倉時代までの古彫刻の内部構造造像法を検討し、真偽の判定にも役立つような基礎資料を集めることに努めている。

柳 沢 孝（第一研究室）

〔Ⅰ〕 日本仏教絵画史の研究

- (1) 平安時代後期の絹絵仏画に関し、光学的方法を援用して実証的な調査と研究を行なう。
- (2) 白描図像並びに鎌倉時代以降の絹絵仏画の遺品に関する調査研究。
- (3) 平安・鎌倉時代の壁画遺品の実証的調査研究。

〔Ⅱ〕 平安時代後期世俗画の研究

特に四天王寺扇面法華経冊子に関する調査研究。

〔Ⅲ〕 敦煌絵画の研究

敦煌請来絹絵のうち、年記銘のある遺品について研究を継続する。

田 村 悦 子（第一研究室）

〔Ⅰ〕 日本の書の変遷の要素の研究

書の変遷とは何かを分析的に研究して如何なる要素の変化の積聚であるかを解明した上、日本のそれと中国のそれとの同異の比較的研究に進む。

〔Ⅱ〕 異体字の歴史的研究

漢字の文字史的研究のうち極めて重要な同音・同義で形を異にする「異体字」の時代的消長の研究を行ない、この年度は特に平安時代のそれを主とする。

〔Ⅲ〕 絵と詞書との対応を失った絵巻の研究

- イ 古筆切中の絵巻詞書の調査研究
- ロ 一枚物の古画中よりの絵巻断簡の発見と研究
- ハ 欠脱ある絵巻の絵及び詞書の比定と研究

猪川 和子（第一研究室）

〔Ⅰ〕 平安、鎌倉時代彫刻の調査研究

全国各地に分布する平安、鎌倉時代の彫刻を調査し、作品資料の蒐集整理を行い、時代作風、技法、作家の系統等を考察、文献資料の蒐集によってそれらの裏づけを行ない、日本彫刻史の研究に資する。

〔Ⅱ〕 尊像別分類による彫刻の研究

〔Ⅰ〕の展開として、尊像別分類により諸尊の図像的整理を行なう。その上で、たての系譜として伝承と発展、よこの関係ではその類別を究め、歴史的背景、様式的特色、作風、時代変遷をより鮮明に把握する。

〔Ⅲ〕 南北朝時代在銘像を中心とする調査研究

従来あまり問題にされなかった南北朝前後の時期の在銘彫刻が、近年続々と新しく発見されている。これらの諸像の基礎調査を行なって、この時代の彫刻の諸相を考察、作家の系譜、注文者との関係等、文化史的に興味ある問題を追求する。

宮 次 男（第一研究室）

〔Ⅰ〕 絵巻物の研究

絵巻の遺品について網羅的に調査し、その編年の研究を行なうことによって、様式の変遷をあとづけ、時代的・流派的特色を明らかにする。

〔Ⅱ〕 肖像画の研究

主に似絵・高僧像・頂相を対象とし、影像と似絵の関係、高僧像・羅漢画の時代的特色と様式の変遷、頂相における日本の特質など、遺品調査にもとづいて検討する。

戸 田 禎 佑（第一研究室）

〔Ⅰ〕 宋元時代人物画の研究

すでに蒐集を行なった羅漢十王図の資料を用いて、その体系的な整理を行なう一方、京都・大阪中心に未調査の資料の蒐集を続行する。

〔Ⅱ〕 南北朝時代道釈画の研究

V 研究活動及び事業

中国宋元仏画と日本の南北朝仏画との関係を実際の遺例の比較によつて具体的にとらえる。

〔Ⅲ〕 来舶清人画家の研究

江戸時代に渡来し、日本の近世文人画壇に影響を及ぼした人々の作品の調査、資料の蒐集につとめる。

秋 山 光 和（第一研究室）研究員（非）

- 〔Ⅰ〕 日本古代中世絵画史の研究 a) 7—8 世紀における日本絵画と大陸との関係
b) 説話画と物語絵の展開（特に三宝絵・聖徳太子伝絵・源氏物語絵などに
関する調査研究） c) 四天王寺「扇面法華経」の研究
- 〔Ⅱ〕 敦煌絵画の研究 a) 紀年銘ある絹絵紙絵の調査研究（特に開元年銘の僧形像
について） b) 石窟寺院壁画の編年的研究（特に7—8 世紀壁画について）

岡 畏 三 郎（第二研究室長）

- 〔Ⅰ〕 明治末より大正期へかけての新絵画運動についての研究
フェーザン会以後の在野団体の運動を主として。
- 〔Ⅱ〕 日本近代美術の発達に関する明治・前期・中期の基礎資料の調査研究（特別研究）
新聞雑誌その他、当時の刊行物或は関係者の書簡、作品等を調査し明治美術
研究の基礎的な資料の蒐集を行なう。
- 〔Ⅲ〕 近代日本美術に及ぼせる19世紀ヨーロッパ美術の調査研究
西欧各国の美術館等における作品（主として絵画）につき影響関係を実証的
に調査する。
- 〔Ⅳ〕 山下りん・横山松三郎等、初期洋画家の伝記資料、作品の調査研究

関 千 代（第二研究室）

- 〔Ⅰ〕 日本近代絵画史の研究
狩野芳崖の作品と伝記資料及びその周辺についての調査研究。
- 〔Ⅱ〕 現代美術の動向についての調査研究
現代関係の作家、作品並びに団体等について汎く調査し、現代美術の動きを

捉えて整理研究を続行。

〔Ⅲ〕 日本近代美術の発達に関する明治前、中期の基礎資料の調査研究（特別研究）

坂 本 満（第二研究室）

〔Ⅰ〕 近世美術における東西交流

16・17世紀の日本におけるキリスト教布教に伴う洋風美術の調査とその源泉としての欧州美術、とくに銅版画の調査およびその整理と研究を続行している。

〔Ⅱ〕 マニエリスムとバロック美術

16世紀のマニエリスムのうち、とくに国際様式の研究（〔Ⅰ〕と関連がある）と建築を中心としてバロック美術の研究を続行。

陰 里 鉄 郎（第二研究室）

〔Ⅰ〕 大正・昭和初期絵画の調査研究

万鉄五郎の作品および関係資料について調査と研究を続行。

野田英夫、松本竣介について調査。

〔Ⅱ〕 初期洋風美術の調査研究

第2次洋風美術、特に幕末期の洋風画家についての調査。

〔Ⅲ〕 日本近代美術の発達に関する明治前・中期の基礎資料の調査研究（第二研究室全員による特別研究）

〔Ⅳ〕 現代美術の調査研究

川 上 湊（資料室長）

〔Ⅰ〕 中国絵画史の研究

中国絵画史研究の基礎作業として、宋元明清画家の作品および伝記資料の蒐集整理を継続。

〔Ⅱ〕 南北朝を中心とする日本中世美術の形成過程の研究（44～，共）

昭和45年度文部省科学研究費総合研究 A. 前年度にひきつづき、代表者として中川・田村・猪川・宮・戸田および東京国立博物館海老根聰郎・中島純

司，東京学芸大学赤沢英二と研究班を組織。

田 実 栄 子 (資料室)

〔Ⅰ〕 近世初期染織品の研究

上杉神社所蔵の伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類の調査・研究を中心に，伝徳川家康所用服飾類等同時代の服飾類，名物裂系統外来裂の調査・研究を統行。

〔Ⅱ〕 小袖の研究

形態の変遷，模様の様式並びに技術・技法の変遷・進展，用布の地質の調査・研究を統行。

〔Ⅲ〕 伝統的染織の調査・研究

わが国における伝統的染織品並びにその技術・技法の調査を機会ある毎に行なって研究を統行。

〔Ⅳ〕 上代裂の研究

主として東京国立博物館保管の正倉院裂，法隆寺裂を調査対象に研究を統行。

永 雄 ミ エ (資料室)

〔Ⅰ〕 日本・東洋美術史の文献学的研究

辻 惟 雄 (資料室)

〔Ⅰ〕 初期狩野派の研究

正信・元信から松栄・永徳にいたる初期狩野派の展開過程を，各画家の伝記・作品の研究とあわせて検討する。

〔Ⅱ〕 江戸狩野の研究

探幽・尚信ら，いわゆる江戸狩野の形成過程を明らかにするための研究を統行。

〔Ⅲ〕 江戸時代における表意主義的画家の系譜の検討

曾我蕭白・岩佐又兵衛・国芳・芦雪らの研究を統行，

〔Ⅳ〕 葛飾北斎の読本の研究

北斎芸術の未開拓な分野である読本挿絵の資料収集および内容検討を行なう。

江 上 綏 (資料室)

〔Ⅰ〕 平安朝の絵画的料紙装飾の研究

平安朝の料紙に施された絵画的装飾を絵画史的見地から研究する。

〔Ⅱ〕 日本古代文様の様式的、形式的研究

日本古代文様全般を様式・形式の両面から歴史的に研究する。

関 口 正 之 (資料室)

〔Ⅰ〕 密教画の研究

明王像（特に愛染明王像）を中心に資料を蒐集整理し展開の諸相を検討する。

〔Ⅱ〕 浄土教画の研究

総合研究「平安時代における浄土教美術の総合的研究」の絵画部門を分担。

阿弥陀来迎図・浄土変相図を実証的に検討する。

〔Ⅲ〕 日本古代文様の様式的・形式的研究

仏画に使用される装飾文様を蒐集整理し尊像画との関連を追求する。

〔Ⅳ〕 南詔・大理における仏教美術の研究

遺品に表わされた各種尊像の図像学的特色と、中央アジア・西藏地方の美術との様式上の影響関係を検討する。

中 村 伝 三 郎 (主任研究官)

〔Ⅰ〕 明治以降の主要彫刻家の伝記資料及び作品の調査研究

(1) 竹内久一の業績について前年度より調査を継続。

(2) 荻原守衛の「生涯と芸術」のうち〈画家志望の在京時代〉を改めて考究。

(2) 石井鶴三の明治末から昭和前期にいたる多面的な美術業績について。

〔Ⅱ〕 現代日本美術の調査研究

(1) 彫刻を中心に工芸・絵画の動向を総合的に常時調査考究している。

(2) 国際美術展を主とした戦後美術の動向の調査研究

東京国立近代美術館との総合研究（科学研究費）に参加、「日本に招来され

V 研究活動及び事業

た国際美術展」を分担。

- 〔Ⅲ〕 日本近代美術の発達に関する明治前・中期の基礎資料の調査研究
第二研究室を主とする＜特別研究＞を分担。

上 野 ア キ (主任研究官)

- 〔Ⅰ〕 大谷コレクションの研究

同コレクション全貌把握のため、資料収集及び様式的検討を継続。

- 〔Ⅱ〕 中央アジア古代絵画史研究

中央アジア古代絵画遺品について、国内資料の収集考察を行なうとともに、
在外資料の収集・交流を行なう。

- 〔Ⅲ〕 敦煌絵画研究

敦煌画の展開過程を示す基準作例の系列の中に仏伝図の位置づけを行なう。

C 研究・調査活動 (昭和45年1月～昭和46年3月)

中 川 千 咲 (美術部長)

- 〔Ⅰ〕 金沢石川県立美術館、中村記念館等にて古九谷及び漆芸品の調査を行ない、
また9月発掘の古九谷窯跡、発掘破片の調査もした。46年3月佐賀県有田にて柿右エ
門関係の諸資料及び柿右エ門窯、今右エ門窯における伝統的窯技の調査を行なった。

また中世陶芸の資料整理を行ない、近代陶芸に関しては横浜神部氏、野村氏など所
蔵の陶磁、その他近代工芸作品の調査をした。

久 野 健 (第一研究室長)

45年1月には小田原松田福一郎氏所蔵の菩薩半跏像、蔵王権現懸仏等の調査、3月
には六波羅蜜寺諸像の調査を行なう。同年5月には、新潟県不動堂薬師如来像、同茂
林寺地藏半跏像、同願成寺銅造観音菩薩像等の調査、7月には、千葉、大勝寺の阿弥
陀如来像、8月には千葉、天福寺の十一面観音像の調査撮影を行なった。9月には、
愛知県常滑市の大善寺十一面観音像、同高讀寺の仁王像、同曹源寺阿弥陀如来像、9
月末には千葉来福寺の賢光作の薬師如来像の再調査と撮影、10月には福井県小浜市の
長福寺十一面観音像、同国分寺の薬師如来像、同正法寺の半跏思惟像等の調査撮影を

行ない、11月には長野県薬王寺薬師如来像、無量寺の阿弥陀如来像、瑠璃寺薬師三尊像の調査、12月には、岐阜県願興寺の釈迦如来像、明鏡寺の聖観音像、円鏡寺の不動明王像の調査を行ない、46年1月には愛知県七ツ寺の観音、勢至像、林光寺薬師如来像等の調査を行なった。2月には、静岡県の赤野山観音堂十一面観音像、西光院阿弥陀三尊像等を調査、3月には石川県の薬師寺の諸像、伏見寺の阿弥陀像等を調査した。このうち、天福寺の十一面観音像を制作した仏師賢光については、論文にまとめ、美術研究に発表、中部地方の諸像の調査結果は、近く中部古代彫刻史論として論文にまとめる予定である。

柳 沢 孝 (第一研究室)

〔Ⅰ〕 1) 平安後期の絹絵仏画遺品に関しては、藤田美術館所蔵両部大経感得図の修理を機会にX線写真による撮影と詳細な調査とを行ない、特に補筆補彩について検討を加え、また色紙形下からあらわれた鷹図についての報告を美術研究に発表した。唐本曼荼羅の珍しい遺品、大仏頂曼荼羅と未紹介の普賢菩薩とを、光学的方法によって精査し、かつ図像学的な面からも考察した。2) 知恩院並びに京都国立博物館寄託の浄土教関係絵画の調査研究を実施したほか、白描図像についても個人蔵十巻抄等の調査やアメリカ各地の美術館所蔵にかかる白描図像の整理と研究とを行なった。3) ユネスコ東アジア研究センター仏教美術研究部会の専門委員として、九州富貴寺阿弥陀堂壁画の調査並びに写真撮影の実施に参加した。4) また同専門委員として、1960～69年の10年間にわたる仏教美術関係の著書並びに雑誌文献の目録作成を担当した。

〔Ⅱ〕 四天王寺及び個人所蔵扇面法華経について再調査を行ない、またその製作に関する重要史料を含む玉葉の記事を内閣文庫、書陵部等にある写本と校合したほか、扇面法華経の経文の異同を検索するため、田中親美氏所蔵平家納経、久能寺経両模本の調査と写真撮影を実施した。

〔Ⅲ〕 敦煌請来の絹絵遺品のうち、前年度に続き、年記銘の解読と図像学的な研究並びに様式的な考察を行ない、その一部を整理して口頭発表した。

田 村 悦 子 (第一研究室)

〔Ⅰ〕 日本における書道の展開の一つの著しい変遷は中国書道から日本風書道への

転換で、その際の固有名詞として三蹟の道風、佐理、行成が意義を有する。この観点から正木美術館蔵道風三体白氏詩巻・行成後嵯峨院本白氏詩巻の調査を行なった。又いま一つの変遷として、管唐書道から日本化した書道が再び中国書道—宋元書道—に影響される伏見・後伏見天皇等の上代様書道は純日本風のもののようになっているが、宋元書道の刺戟に負う所があるものという推測をたててその遺品の分析を試みた。

〔Ⅱ〕 異体字の歴史的研究としては、資料の採集に努めてきているが、本年度には奈良時代の続きから平安時代に入り漢籍・仏書の古鈔本のみならず平安時代には国書の古写本も姿を現わすのでそれらから異体字を収集し整理を進めている。

〔Ⅲ〕 古筆切調査に際し絵巻の詞書の切に会い、如何なる絵巻の詞かの研究に入り、又独立の古画とみえるものに絵巻から切取った絵も少なくないことに気付き何の絵巻に属するかを研究したが、第三に、巻子をなしている絵巻でも詞や絵が切抜かれて詞と絵との対応を失いその絵の解釈が誤っているものについて正しい比定を与え、原家旧蔵伊勢物語絵巻の絵解きを発表し、且又、詞書の下絵がその巻の扱う物語即ち伊勢物語に材をとったことを見いだした。

猪川和子（第一研究室）

昭和45年度は、研究題目〔Ⅰ〕の平安時代彫刻の作例である滋賀石山寺の如意輪観音像が、奈良時代に塑造の観音菩薩像が造られて後、火災にあい、現在の木彫像に造り変えられた時期について従来諸説があったが、これを再検討し、石山寺関係の諸記録等を始めとする文献を調査し、それらの裏付けからも、従来秘仏として様式的特色を全面的に捉えることが困難であったこの像の造立は、本堂の再建時にその時期を推定するのを妥当と考えた。そのため、ほぼ同時代の作例である京都万寿寺、即成院、滋賀浄厳院その他の丈六像の調査を行ない、様式的考察に資した。また九州地方の諸作例についての研究の一部として、前年調査を行なった観世音寺と大分真木大堂像について小論をまとめた。〔Ⅱ〕については前年度に十世紀基準作例を中心とする四天王の一系統の像の整理を行なったが、爾余の作例に関して未調査の像の資料蒐集を行なった。〔Ⅲ〕の南北朝時代を中心とする在銘彫刻の作例のうち、京都法園寺、匡王寺、正法寺、奈良松尾寺、長円寺、和歌山広利寺、興国寺、兵庫福祥寺、岡山妙圀寺、愛知願成寺、実相寺、他、新発見の諸像を含む基準作例の調査撮影を行なった。

宮 次 男 (第一研究室)

〔Ⅰ〕 一遍上人の絵伝の諸本の研究を前年にひきつづき行ない、聖戒本と宗俊本の成立事情に検討を加え、一遍上人絵伝に関する研究をまとめた。また45年11月下旬に徳川美術館蔵の絵巻：破来頓等絵巻・長谷寺縁起など、同館所蔵の絵巻（除源氏物語絵巻）類を調査・撮影した。

〔Ⅱ〕 「日本肖像画の基礎的研究」の課題により科学研究費補助金の交付を受けて、肖像画の基礎資料の収集と調査・研究を行なった。その主なものは、東京・京都・奈良の国立博物館所蔵及び寄託肖像画、徳川・藤田・正木美術館所蔵肖像画・羅漢画の調査研究・写真撮影を行ない、特に似絵関係遺品と高山寺関係肖像画に重点をおいた。そのほか、既刊出版物掲載の肖像遺品索引カードの製作、および、当研究所所蔵の肖像画写真の原板索引カードの製作をあわせ行なった。

戸 田 禎 佑 (第一研究室)

宋元代の人物画の研究を行っており、45年6月に台北市の国立故宫博物院で開かれた、中国画に関する国際シンポジウム（中国古画討論会）では、「元末人物画と禅余画家」というテーマで発表を行ない、日本に遺されている中国画の資料を紹介するとともに、従来の中国人物画の展開について、再考すべき諸問題点の指摘を行なった。この研究は更に拡大化し集大成しなければならず、目下、その達成につとめている。

秋 山 光 和 (第一研究室) 研究員(非)

1. 故宫博物院（台北）所蔵中国絵画の調査
2. 扇面法華經の調査（四天王寺，西教寺，個人蔵）
3. 富貴寺阿弥陀堂壁画の調査
4. 聖徳太子伝障子絵の調査

岡 畏 三 郎 (第二研究室長)

1. 大正期における新絵画運動について、当時刊行の諸資料の調査、蒐集のほか、

V 研究活動及び事業

当時活動せる現存画家を訪ね、聞き書き、並びに所蔵資料の複写蒐集につとめ研究を続けている。

2. 昨年以来継続の明治美術の基礎資料の調査研究については、新聞、雑誌、その他当時の記録をもとに、明治初年から編年的に、美術関係施設、展覧会、博覧会、美術界の動向につき資料の調査、蒐集をすすめている。

3. 19世紀ヨーロッパ美術と日本近代美術との影響関係を調査のため、45年11月より46年2月迄、在外研究員としてフランス、スイス、英国、ドイツ、等西欧10ヶ国に出張、各地の美術館、個人蔵の作品（主として絵画）について調査を行なった。

4. 初期洋画家の伝記資料、作品調査は山下りんについて関西地区の正教会関係を調査した。

関 千 代（第二研究室）

(1) 狩野芳崖の作品と伝記資料についての調査蒐集を次の通り行ない、多くの資料を得ることが出来た。下関市長府博物館並びにその近在所蔵家の協力により比較的初期作品についての資料を得られこれを調査撮影した。又芳崖が依頼され制作した鹿児島市島津家蔵品の調査撮影を行なった。神奈川県下丹波恒夫邸において芳崖模写のジョルジオネ筆聖母子像（石版画）の調査撮影を行なった。東京芸術大学には多くの資料が蔵されるが、この一部についての調査撮影に着手した。(2) 比叡山延暦寺取蔵「伝教大師絵伝」（前田青邨ほか諸家執筆）の調査撮影ほか、山種美術館における小林古径展などにおいても之を行なった。(3) 東京大学新聞研究所において明治5年以降美術関係記事の探索を行なった。時期的に資料の乏しいのは止むを得ないが、高橋由一「花魁」など関連資料の若干を得た。

坂 本 満（第二研究室）

先年度に引続いて近世美術における洋風美術の調査を行ない、その結果の一部を「南蛮美術と洋風画」（小学館）に発表し、また、美術部研究会、蘭学資料研究会例会において発表した。7月、京都府立総合資料館における南蛮文化とキリシタン遺宝展の調査、その他大阪周辺の遺品について調査を行なった。

朝日新聞社主催スペイン美術展に参画し、出品諸作品を研究調査した。

陰 里 鉄 郎 (第二研究室)

先年度に引続き、万家の万鉄五郎関係資料を調査し、その結果は美術研究の論文のなかに発表した。松本竣介、野田英夫については、文献資料の調査と併行して、松本記念室（神奈川県立近代美術館）、有馬氏所蔵作品を調査撮影した。

初期洋画に関しては、東京国立博物館版画室、蔵本莊五郎氏蔵の亜欧堂田善作品を調査、また大阪市周辺に所在する作品の調査も行なった。

川 上 湊 (資料室長)

万国博美術館出陣の中国画、とくに海外より出品された諸作品を調査した。

昭和45年2月および46年2月に、正木美術館所蔵中国絵画・日本中世絵画、中国ならびに日本の書蹟等約250点の調査を行なった。

昭和45年6月、台北の国立故宫博物院主催「中国古画討論会」に参加した。

田 実 栄 子 (資料室)

研究題目の中、特に力を注いでいるのは従来通り「近世初期染織品の研究」で、この時期のわが国の染織工芸は近世初期（16世紀前後）に輸入された外来染織品並びに外来染織技術の影響が極めて甚大であるため、従来の国内に於いての研究調査に加えて、この年は西欧の博物館に蔵される同時代の染織品との比較研究調査（主として北欧の博物館蔵染織品を対象に）のため、昭和45年4月下旬から5月中旬にかけて海外出張した。またこの年は当研究所美術部の総合研究と東京国立博物館工芸課の総合研究の二つの科学研究費に加わっているため、この研究の調査では、米沢・上杉神社、仙台市博物館、白石・片倉家、日光・東照宮、名古屋・徳川美術館、京都・高台寺等、実物調査も頻繁に行なった。

また小袖の研究、伝統的染織の調査・研究、上代裂の研究は機会あるごとに従来通り、所蔵家や技術の現場に出向いて続行している。

辻 惟 雄 (資料室)

初期狩野派研究については、狩野元信三（美術研究270号）狩野元信四（同271号）

V 研究活動及び事業

狩野元信五（同 272 号）において、これまでの元信研究の結果の報告を一応完結した。今後は狩野永徳の研究を中心に調査を続行する。出張調査については昭和45年6月日光東照宮の依頼で同社陽明門天井画の調査に赴き、手法や筆者について検討した。また46年2月に日光東照宮蔵の蒔絵・杉戸絵その他の調査を科学研究費によって行なった。3月には四国地方の調査によって、四条円山派・文人画等の新資料を多く得た。

北斎の読本については、この分野の全図を収録した本を出版すべく準備を進めている。

江 上 綏（資料室）

平安時代の料紙装飾の研究としては、奈良興福寺蔵の重要文化財紺紙金字成唯識論の表紙絵・見返し絵など、經典の料紙装飾の研究調査を中心に進めた。上記の成唯識論の表紙、見返しは、紗と綾を用いた西本願寺本三十六人集に類似のもので、その絵画装飾の様式の年代も非常に近く、貴重な絵画史料であるが、これまであまり紹介されていない。古代文様については、今年度は特に大陸との関係に重点を置いて、資料収集とその発展に関する研究を進めた。

関 口 正 之（資料室）

〔Ⅰ〕 密教画の研究の継続として随心院受染曼荼羅図、醍醐寺受染曼荼羅図、醍醐寺受染明王像、細見家受染明王像の調査を行なった。

〔Ⅱ〕 浄土教画の研究は文部省科学研究費総合研究「平安時代における浄土教美術の総合的研究」の絵画部分を分担し、安楽寿院、興福院、三千院の阿弥陀二十五菩薩来迎図、一心院阿弥陀来迎図を調査し、知恩院蔵浄土教画、三千院壁画、富貴寺壁画の調査を実施した。

〔Ⅲ〕 日本古代文様の研究では、一般研究「大陸との関係における日本古代絵画史料としての文様の研究」（江上綏）の研究協力者として富貴寺、興福寺、春日大社等の作品を調査し資料蒐集につとめた。

中 村 伝 三 郎（主任研究官）

（1） 9月～10月、福岡市博多東公園に設置されている竹内久一製作「日蓮上人銅像」

並びに山崎朝雲製作「亀山上皇銅像」(共に明治 37 年11月 8 日除幕)を詳細に調査、正・側・背面から写真撮影を行ない、両銅像に関する現地での口伝・文献資料の多くを蒐集した。さらに、神戸市に於て、須磨離宮公園で開催中の第 2 回現代日本彫刻展を調査、写真撮影を行なった。

(2) 46 年 3 月、倉敷大原美術館へ赴き、特に戦後同館に収蔵された外国作品について調査、資料を蒐集した。

上 野 ア キ (主任研究官)

敦煌画仏伝図につき詳細な検討を行ない、概要の記述を主とする(上)を公表し、その展開過程の考察を(下)として近く発表の予定である。東大の科学研究費による総合研究「敦煌絵画の研究」に「敦煌に於ける仏教説話図の研究」を分担し、種々の資料交換の場を得て、研究を発展させる上に得る所大であった。なお敦煌画仏伝図との関連に於て、アジア各地域の仏伝図の資料の収集・検討につとめた。また従来より研究課題である大谷コレクション及び中央アジア絵画史研究についても、資料の収集・交換・考究につとめ、新知見を得た。

D 主要研究業績

①: 著書	②: 論文	③: 解説
④: 研究発表	⑤: 講演・放送	⑥: その他
昭45・1~昭46・3		

中 川 千 咲 (美術部長)

- | | | |
|------------|-----------|-------|
| ②江戸時代陶芸の流れ | ミュージアム235 | 45・10 |
| ④古九谷の問題 | 美術部研究会 | 45・9 |
| ⑤九谷の意匠 | 石川県教育委員会 | 45・10 |
| ⑥意匠と文様 | 佐賀県教育庁 | 46・3 |

久 野 健 (第一研究室長)

- | | | |
|------------------|----------|-------|
| ①美術史、日本(辻・永井と共著) | 近藤出版社 | 45・1 |
| ①法隆寺(鈴木嘉吉と共著) | 小学館 | 46・3 |
| ②箱根本地仏懸仏について | 史迹と美術405 | 45・6 |
| ②飛鳥初期の彫刻 | 月刊文化財87 | 45・12 |

V 研究活動及び事業

- ②仏師賢光の十一面観音像について 美術研究274 46・3
- ③天平の彫刻 学習研究社「日本と世界の歴史5」 45・2
- ③截金文様の地藏菩薩立像二軀 古美術30 45・6
- ③最澄と美術 比叡山時報 45・7
- ③夢殿の秘仏 中日新聞 46・2
- ④箱根神社の本地仏について 美術部研究会 45・4
- ⑤鎌倉文化と運慶 NHKテレビ 45・7
- ⑤新潟県下の仏像彫刻 新潟県教育委員会講演会 45・7
- ⑤東国の彫刻 東京国立文化財研究所開所記念講演会 45・11

柳 沢 孝（第一研究室）

- ②永久寺真言堂障子絵色紙形より出現の鷹図について 美術研究266 45・3
- ③両界曼荼羅関係作品解説 講談社「日本絵画館2」 46・2
- ④日野原家大仏頂曼荼羅について 美術部研究会 45・12
- ④年記銘ある敦煌絹絵遺品について 敦煌絵画研究会 45・12
- ⑤来迎図について 仏教青年会 46・2

田 村 悦 子（第一研究室）

- ②原家田蔵伊勢物語絵巻の絵解き一併に詞書とその下絵に関する私見一 美術研究273 46・3
- ③付載，材木注文行間書釈文（寝殿造邸宅に関する造営文書） 「日本建築史研究」続篇 46・1
- ④伊勢物語絵巻の絵解き 美術部研究会 45・6

猪 川 和 子（第一研究室）

- ②仏工のらくがき 日本美術工芸379 45・4
- ②観世音寺馬頭観音像と真木大堂大威徳明王像 仏教芸術76 45・6
- ②石山寺本尊観音菩薩像 美術研究272 46・1
- ④石山寺本尊像について 美術部研究会 45・10

宮 次 男 (第一研究室)

- ①日本絵画館 4 鎌倉 (共著) 講談社 45・3
 ①一遍上人絵伝 至文堂 46・1
 ①日本絵画館 2 奈良・平安 I 講談社 46・2
 ②乱世の絵巻 望星1-3 45・8
 ⑤説話絵巻の展開 美術部公開学術講座 45・10

戸 田 禎 佑 (第一研究室)

- ②伝牧溪筆, 芙蓉図をめぐる二, 三の考察 仏教芸術79 45・12
 ③元画白衣観音図 国華922 45・6
 ④中国古画討論会について 美術史学会例会 45・10
 ⑤元末人物画と禅余画家 故宮博物院主催中国古画討論会 45・6

秋 山 光 和 (第一研究室) 研究員(非)

- ②New Buddhist Sects and *Emakimono* (handscroll painting) in the Kamakura Period (Acta Asiatica, Bulletin of the Institute of Eastern Culture. No. 20. March 1971)
 ④Langdon Warner 将来の敦煌壁画 敦煌絵画研究会 45・9
 ④紀年銘ある敦煌仏画 (唐代) 敦煌絵画研究会 45・12

岡 畏 三 郎 (第二研究室長)

- ①「近代洋画の抬頭と展開」並びに作品解説 講談社「日本絵画館・明治」45・1
 ①「浮世絵」(1~12巻) 共著 毎日新聞社 45.1~46.3

関 千 代 (第二研究室)

- ②上村松園とその作品 三彩256 45・3
 ②仮面会について ユリイカ 45・9
 ③近代日本画家 (小学館百科辞典ジャポニカ) 小学館 45・10

V 研究活動及び事業

③岡田三郎助

日本郵趣 45・5

坂本 満 (第二研究室)

- ①南蛮美術と洋風画 小学館「原色日本の美術25」 45・6
- ②フォンテヌブロー派の版画 みづゑ785 45・5
- ②スペイン美術展カタログ 朝日新聞社 45・5
- ②バロックの美術 小学館「日本と世界の歴史」 45・10
- ②「古典主義者」リューベンス 別冊みづゑ61 45・12
- ③スペイン美術の特性と背景 東京大学新聞 45・5
- ③ミレーの生涯と芸術 週刊読売増刊ミレー特集号 46・9
- ③「美の美」(レオナルド他) 日本経済新聞 45・5~12
- ④スペイン美術展の諸作品について 美術部研究会 45・6
- ④浮世絵・洋風画に反映した西欧画家 蘭学資料研究会 45・12
- ④江戸時代絵画における洋風モチーフの源泉 美術部研究会 46・1
- ⑤ゴヤの「マハ」 ブリジストン美術館 45・3
- ⑤スペイン美術展について 千葉市扇屋デパート講堂 45・5
- ⑤王侯と民衆(ベラスケスとゴヤ) 東博講堂 45・6
- ⑤座談会「スペイン美術展への招待」 TBSテレビ 45・5
- ⑤ベラスケス ブリジストン美術館 45・10

陰里鉄郎 (第二研究室)

- ②江戸の洋風画 季刊芸術12 45・1
- ②松本竣介の世界 世界293 45・4
- ②野田英夫について 世界296 45・7
- ②万鉄五郎 生涯と芸術(4) 美術研究273 46・4
- ②日本の近代美術のなかの表現主義 三彩270 46・3
- ③明治の洋画 講談社「日本絵画館・明治」 45・1
- ③坂本繁二郎展 朝日ジャーナル12—9 45・3
- ③「美の美」(日本近代洋画) 日本経済新聞 45・5~9

⑥高橋由一の石版画	素描11	45・3
⑥原田実著「岡倉天心」書評	三彩257	45・3
⑥モダンアート展他公募展評	共同通信	45・4
⑥春陽展他公募展評	共同通信	45・5
⑥坂本勝著「佐伯祐三」書評	美術手帖328	45・6
⑥院展・二科展評	共同通信	45・9
⑥院展・二科展評	読売新聞	45・9
⑥小出梢重展評	美術手帖335	45・12
⑥現代美術の展望	日本経済新聞	46・1
⑥近代美術と表現主義	読売新聞	46・1

・川上 湮（資料室長）

②祁多佳の生年	美術研究269	45・11
---------	---------	-------

・田実栄子（資料室）

②桃山・江戸前・中期の産衣十三領について 上・中		
一近世小裁・中裁衣類調査報告1, 2—	美術研究 ²⁶⁷ ₂₇₂	45・8 46・3
③伊達家伝来服飾類（染織品）解説	伊達家遺芳展目録	45・3
③伊達家伝来服飾類図版解説	小学館「南蛮美術と洋風画」	45・6

辻 惟雄（資料室）

②狩野元信(3)(4)(5)	270	45・11
	美術研究271	45・12
	272	46・3
②寛文美人から師宣へ—近世絵画における怪奇表現の系譜—		
	小学館「風俗画と浮世絵師」	46・3
③豊国祭図屏風解説	国華924	45・7

江上 綏（資料室）

②本願寺本三十六人集表紙絵の復元と考察	美術研究268	45・9
---------------------	---------	------

V 研究活動及び事業

関口正之(資料室)

- ②細見家所蔵愛染明王画像について 美術研究274 46・3

中村伝三郎(主任研究官)

- ②萩原守衛一その生涯と芸術—(中) 3 美術研究274 46・3
- ③小堀進, 服部正一郎, 本郷新ら6名の現代洋画・彫刻作品について解説
週刊サンケイ 45・6~12
- ③9回現代工芸美術展に期待する 読売新聞夕刊 45・4
- ⑤近代日本の彫刻家たち 神奈川県立青少年センター 45・3

上野アキ(主任研究官)

- ②敦煌本幡画仏伝図考(上) 美術研究219 45・11
- ③日本美術史1~6 プリンターズサークル 2-4, 6, 8, 10 45・2
3-2, 4 ~46・2
- ③中央アジア絵画数点解説 万博美術展目録 45・3
- ④敦煌本幡画仏伝図 敦煌絵画研究会 46・3
- ⑤仏伝画の系譜 美術部公開学術講座 45・10

E 科学研究費題目

(Ⅳ予算2 科学研究費補助金交付決定額の項参照)

(2) 芸能部

芸能部は、日本の伝統芸能の保存に資するために必要な基礎的理論的研究を行なう。

芸能部は、演劇研究室・音楽舞踊研究室及び郷土芸能研究部の三室より成る。

演劇研究室においては、日本古典演劇(主として歌舞伎・人形浄瑠璃などの近世演劇)を、音楽舞踊研究室においては、日本古典音楽及び日本古典舞踊(雅楽・声明・平曲・能・邦楽・邦舞など)を、郷土芸能研究室においては、全国各地に分布して伝統芸能の源流や展開の過程を示す民俗芸能を、それぞれの研究対象とする。

各室の研究目標としては、以上の諸芸能の理念・構造・技法・技術及びその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備、記録の作成として

の撮影・録音などの作業を行なう。また研究の結果は、刊行・講演会の開催などによって公表する。

A 研究・調査活動の概要

芸能部全員による共同研究としては、前年度に引き続き、(1)歌舞伎音楽の研究、(2)古典芸能記録の整理方法の研究を行なつたが、この間新庁舎への移転に伴う諸作業があり、特に録音室・調整室・視聴室など、新施設の運用に必要な特殊機器の設置についての多角的な検討に、多くの時日が割かれた。(1)については、杵屋栄二氏所蔵の付帳から得た写真資料により、分析研究を行ない、(2)については、安原コレクション邦楽レコードの整理方法の研究を続け、「音盤目録Ⅱ」を刊行、Ⅲ・Ⅳ刊行の準備を進めた。

次に各研究室におけるおもな研究調査活動を挙げる。演劇研究室においては、(1)各地の大学・図書館所蔵の演劇資料の調査・撮影・整理を続け、(2)地芝居・農村舞台・掛踊りなどの調査研究を行なつた。また新設の録音室において、歌舞伎囃子の演奏を録音した。

音楽舞踊研究室においては、(1)東大寺修二会の研究、(2)能の様式の研究を行なつた。(1)については、昭和40年から引続き、修二会の全期間を通じて、詳細な調査・録音を行なつたほか、併せて写真撮影を行なつた。成果を逐次刊行する予定で、作業を進めている。(2)については、前年度まで4ケ年にわたって行なつた能楽全般にわたる構成および技法の研究について、横道万里雄室長を中心に、所内4名・所外9名が参加し、研究成果を公表する準備としてのまとめを行なつた。

郷土芸能研究室においては、沖縄への渡航を初め、各県に出張しての实地調査のほか、東京における全国民俗芸能大会や、ブロック別の地方大会に出場した芸能の撮影・録音などを行なつた。

なお、各研究室は人員寡少のため、随時、他の研究室員の応援参加によって作業を進めた。

B 研究 題 目

浦山政雄（芸能部長）

〔Ⅰ〕近世戯曲の系統的研究

歌舞伎脚本・浄瑠璃丸本・役者評判記・番付類の基礎資料により、近世戯曲の系統別に歴史的変遷を検討する。

〔Ⅱ〕歌舞伎演技譜の研究

歌舞伎の演技の記録を、音楽の譜と並行する総合的な演技譜として完成するための基礎的研究。

〔Ⅲ〕歌舞伎音楽の研究（共）

歌舞伎囃子付帳の分析研究により、歌舞伎演出史を総合的に研究する。

前嶋茂子（演劇研究室）

〔Ⅰ〕掛け踊りの研究

掛け踊りの発生と変遷および現状を明らかにする。

〔Ⅱ〕関東の神楽の研究

能の型付を基本に考えて神楽譜を作成する。

〔Ⅲ〕歌舞伎音楽の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅳ〕能の様式の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

宮本瑞夫（演劇研究室）研究員（非）

〔Ⅰ〕地方芸能史における舞台の研究（45）

全国に分布する農村舞台のうち、とくに歌舞伎・人形芝居など近世劇舞台の変遷・現況を明らかにし、伝承保存されている芸能・文献資料を調査研究。

〔Ⅱ〕近松周辺の浄瑠璃作者の研究（45）

紀海音・錦文流・西沢一風など近松の周辺作家について、その作品・作風・作者の調査研究。海音・一風に重点を置いた。

横道萬里雄（音楽舞踊研究室長）

〔I〕 能の様式の研究 (共)

年間調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅱ〕 歌舞伎音楽の研究（共）

年間調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅲ〕 各宗派声明・寺院行事の比較研究

佐藤道子技官を中心とする研究に参加・協力した。

佐藤道子(音楽舞蹈研究室)

〔I〕 寺院行事の研究 (43~45)

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から、芸能的要素を抽出し、各宗各派にわたる総合的比較研究を行ない、その変遷・分化をあとづける。

(1) 各宗派声明の比較研究

各宗派に共通の声明について、用法・奏演形式・発声法等の分析研究を行ない、その異同を明らかにし、特定宗派の独特な声明については、同様の方法で特色を明らかにする。

(2) 寺院に存在する呪師芸の研究

呪師芸と芸能との関連をたどるため、密教行事を中心として、寺院行事に現存する呪師芸について、研究調査を行なう。

〔Ⅱ〕 能の様式の研究 (43~45 共)

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅲ〕 歌舞伎音楽の研究

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

松 本 雍（音楽舞踊研究室）研究員（非）

〔I〕 能における神樂の研究

。神楽は元来まつりの場における神を招く儀式として発達した。ところが能の神楽は女神の遊舞の楽といわれている。この違いに着目して、能における神楽の位置を歴史的にたどってみた研究。

〔Ⅱ〕 能の様式の研究 (共)

年間研究活動の概要欄に記した通りである。

三 隅 治 雄（郷土芸能研究室長）

〔Ⅰ〕 念仏芸の研究

全国に分布する民俗芸能のうち、特に分布範囲の広い念仏芸系統の芸能の現状と、その伝播・変遷の経路を明らかにする研究。昨年に続いて太鼓踊・盆踊の調査を主として行なった。

〔Ⅱ〕 沖縄舞踊技法の譜化とその分析研究

沖縄諸島に伝承される御冠船踊や民俗舞踊の技法を蒐集整理し、それを舞踊譜化する研究

〔Ⅲ〕 歌舞伎音楽の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅳ〕 民謡歌詞集成の研究

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

仲 井 幸 二 郎（郷土芸能研究室）研究員（非）

〔Ⅰ〕 郷土芸能の研究

44年12月発表の「民俗舞踊の庭」に引きつづき、その発展として、民俗芸能の行なわれる場所のうち特に「境」を取り上げ、古代信仰、民俗生活との関連において「境で行なわれる芸能」の意義を明らかにせんとする研究。

〔Ⅱ〕 民謡の研究

「民謡の民俗学的研究」「民謡研究の目的を究明する研究」の一端として、民謡歌詞、民謡集書目、民謡文献資料等の分類・調査。

〔Ⅲ〕 話芸・寄席芸の研究

邦楽レコードの分類により、落語を主として話芸・寄席芸を対象とする近世芸能の研究。

〔Ⅳ〕 民謡歌詞集成の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

C 研究・調査活動(昭45.1~昭46.3)

浦山政雄(芸能部長)

1. 近世戯曲の系統的研究のため、京都府立総合資料館・大阪府立図書館・愛知県西尾市立図書館・同刈谷市立図書館などの演劇資料を調査した。
2. 地芝居の残存形態研究のため、福島県松枝岐歌舞伎の調査を行なった。
3. 安原コレクション邦楽レコードの内、演劇に分類されるものの整理を終り、「音盤目録Ⅱ」を刊行した。
4. 新施設における録音を、杵屋栄左衛門らによる歌舞伎雑子の演奏によって開始した。特に杵屋富造・胡金吾による上方唄並びに合方の録音はおよそ100曲に達した。

前嶋茂子(演劇研究室)

掛け踊り研究のため、岐阜県郡上郡明方村・八幡町・白鳥町等に残るかき踊り、かき踊りについて調査を行なった。

神楽譜作成のため対象を埼玉県北葛飾郡鷺宮町・鷺宮神社の催馬楽神楽にえらび、35m/m写真・録音等による記録を行なった。

宮本瑞夫(演劇研究室)

近世農村舞台の研究のため、京都府宮津地区(船舞台)・三重県鳥羽地区・長野県上田地区・静岡県磐田郡水窪地区の歌舞伎舞台およびその芸能を調査し、記録・撮影・録音を行なった。

近松周辺の作家研究では、東京芸術大学・演劇博物館・国会図書館・都立日比谷図書館(加賀文庫)・大谷図書館・愛知教育大学(チェンバレン文庫)・市立上田図書館(花月文庫)・市立西尾図書館(岩瀬文庫)・市立刈谷図書館(村上文庫)・大阪城(南木コレクション)などで、主として浄瑠璃本の所在調査・書誌的研究・資料撮影を行なった。

その他、安原コレクション邦楽レコードのうち、演劇に分類されるものを収める『音盤目録Ⅱ』の刊行準備を進めた。

V 研究活動及び事業

横道 萬里雄（音楽舞踊研究室長）

能の様式の研究および歌舞伎音楽の研究については、年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

各宗派声明・寺院行事の研究については、東大寺・延暦寺・法隆寺等についての調査を行い、東大寺修二会をレコード化するための四次元録音を監修した。

佐藤 道子（音楽舞踊研究室）

東大寺修二会については、41年度以降、継続的に研究調査を実施しているが、本年度も引き続き細密な調査を行ない、かつ、レコード化するための四次元録音を監修した。これと関連して、悔過会を中心に南都諸寺の法要行事の調査を行ないつつある。本年度は、法隆寺修正会・修二会についての調査を行なった。

又、延暦寺の主要行事の調査を、44年度から実施しているが、本年度は、修正会・花供養会・座主墓参会・盂蘭盆会・別請堅義について調査を行なった。

その他、東大寺方広会の調査、法隆寺・薬師寺年中行事の基礎調査を行なった。

能の様式の研究および歌舞伎音楽の研究については、年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

松本 雍（音楽舞踊研究室）

神楽の研究の為、神楽が舞われる曲を現行曲及び廃曲の中から選び出し、それらの曲の存在年代を各種資料から推定した。この為、法政大学能楽研究所・国会図書館等で演能記録・日記類を調査した。又、各家に伝わる伝書類から神楽自体の変化をたどった。

三隅 治雄（郷土芸能研究室長）

念仏芸の研究のため、45年度には剣舞（岩手）・竿灯（秋田）・鹿踊（宮城・岩手）・盆踊（大分・熊本）傘踊（鳥取）・浮立（佐賀）等を調査し、写真・録音資料等を蒐集した。

沖縄の舞踊については、二度現地に渡り、真境名由康・同佳子・島袋光裕・金武良章・宮城能造等の伝承者から型や口伝を取材した。

歌舞伎音楽の研究および民謡歌詞集成の研究については、年間調査活動の概要欄に記した通りである。

仲井幸二郎（郷土芸能研究室）

民謡の研究に関しては、民謡集や民謡文献資料のカード作製・分類を行なうほか、それら文献の価値検討をして、一覧作製、書目解題を行なった。

「境の芸能」「杵築・佐太・美保・熊野の出雲四柱の神の研究」及び「塩冶判官の誕生研究」を目的として、出雲地方の現地採集調査を行なった。

民謡歌詞集成の研究については、年間調査活動の概要欄に記した通りである。

D 主要研究業績 $\left\{ \begin{array}{l} \textcircled{1} : \text{著書} \quad \textcircled{2} : \text{論文} \quad \textcircled{3} : \text{解説} \\ \textcircled{4} : \text{研究発表} \textcircled{5} : \text{講演・放送} \textcircled{6} : \text{その他} \end{array} \right. \left. \begin{array}{l} \text{昭45・1} \sim \text{昭46・3} \end{array} \right\}$

浦山政雄（芸能部長）

- | | | |
|-------------------|--------------|-------|
| ②役者と舞踊 | 平凡社 日本の古典芸能Ⅶ | 45・11 |
| ③曾我狂言舞踊集曲目解説 | 国立劇場プロ | 45・5 |
| ③丹波与作待夜の小室節 | 国文学解釈と鑑賞 | 45・10 |
| ⑤歌舞伎の技法 | 白百合女子大学 | 45・4 |
| ⑤せりふ百態—そのメリハリとノリー | 朝日講堂 | 45・12 |
| ⑤日本の舞踊 | 東京教育大学 | 45・12 |

宮本瑞夫（演劇研究室）

- | | | |
|--------------------|-----------------------|--------------|
| ②「義経新高館」小考 | 立教大学日本文学第24号 | 45・7 |
| ③民俗・民俗項目 | 小学館 大日本百科事典ジャポニカ12～16 | 45・3
46・3 |
| ④海音の手法 | 近松の会 | 45・5 |
| ④金平浄瑠璃「清原の右大将」について | 近松の会 | 45・11 |

横道萬里雄（音楽舞踊研究室長）

- | | | |
|-----------------|-----------|------|
| ③能狂言の芸術論・世阿弥の言葉 | 伝統と現代第3巻 | 45・4 |
| ⑤序 破 急について | 日本舞踊協会研修会 | 45・8 |

V 研究活動及び事業

- | | | |
|-------------------|--------|-------|
| ⑤地方に生きる伝統芸能一能・狂言一 | NHK TV | 45・11 |
| ⑤陰囃子の道一組み立てと技法一 | 朝日講堂 | 45・12 |
| ⑥能「鷹姫」上演改訂台本作成 | 京都観世会館 | 45・6 |
| ⑥狂言「子子」上演協力 | NHK TV | 45・7 |
| ⑥能「鷹姫」上演第二次改訂台本作成 | 水道橋能楽堂 | 45・12 |

佐藤道子（音楽舞踊研究室）

- | | | |
|---------------|--------------|--------------|
| ②室町時代の衣生活と能装束 | 被服文化 No. 126 | |
| ③“お水取り”あれこれ | 東京女子大学学報 | 46・2
46・3 |

松本 雍（音楽舞踊研究室）

- | | |
|----------|-----------|
| ③上演曲について | 銭仙175～184 |
|----------|-----------|

三隅治雄（郷土芸能研究室長）

- | | | |
|-------------------------|------------------|----------------|
| ②さすらい人の戯曲 | 歌舞伎7号 | 45・1 |
| ②民間信仰と芸能 | 桜菊183～5 | 45・
1, 3, 5 |
| ②民俗と芸能の間 | 日本の古典芸能6「舞踊」平凡社 | 45・11 |
| ②民俗学よりみた荒事の美術 | 歌舞伎 | 46・1 |
| ②芸能の伝承 | 「古代の日本2」角川書店 | 46・3 |
| ⑤宮廷の年中行事 | NHK TV | 45・1 |
| ⑤地方に生きる伝統芸能一能・狂言一 | NHK TV | 45・11
～12 |
| ⑤東国の芸能 | 東京国立文化財研究所開所記念講演 | 45・11 |
| ⑤福の神と日本人 | NHK TV | 46・1 |
| ⑤さすらい人の芸能史 | NHKラジオ | 46・3 |
| ⑥日本万国博ナショナルデー日本の日催物構成演出 | | 45・6 |
| ⑥日本万国博催物日本の祭制作・演出 | | 45・7 |

仲井幸二郎（郷土芸能研究室）

E 科学研究題目

（Ⅳ予算2 科学研究費補助金交付決定額の項参照）

(3) 保存科学部

文化財の材質・構造・技法の科学的研究，並びに文化財のおかれている保存環境の科学的研究を行ない，これを基盤として文化財の保存と修復に関する技術的研究をしている。換言すれば，文化財の自然科学的研究，文化財を資料とする科学技術史的研究，文化財の保存と修理のための科学技術の応用研究の三方面がある。

研究組織としては，化学研究室・物理研究室・生物研究室・修理技術研究室の4研究室からなっている。

化学研究室

文化財及びその保存に関する化学的及び分析的調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどると規定されている。即ち文化財を構成している各種素材の同定・分析から老化・崩壊過程の究明とその防止の化学的研究である。分析には微量分析及び非破壊分析を主として行っており，老化防止・強化・接着等には合成樹脂等の応用開発に主力を注いでおり，又空気汚染の文化財への影響或は防虫防霉剤の適否についての研究を行なっている。

物理研究室

文化財及びその保存に関する物理的調査研究並びにその公表に関する事務をつかさどると規定されている。文化財自身の構造・強弱・安定等研究のため，材料試験を行ない或はX線写真・γ線写真等の特殊撮影を応用し，又，文化財の保存環境に関し，採光・照明・温湿度等の文化財に及ぼす影響とその防止の研究を行なっている。例えば美術品の博物館内での展示，収蔵庫内での収蔵及び梱包輸送に関し適正条件の設定と調節技術を開発している。

生物研究室

V 研究活動及び事業

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどると規定されている。文化財に使用され又随伴している動植物的材質の判定を行なうとともに黴及び菌・昆虫等による文化財の黴害・菌及び虫害の防除のため保存環境の改善並びに黴及び菌・昆虫等の採取・同定・培養並びに殺菌・殺虫のための薬剤と装置の開発を行なっている。

修理技術研究室

文化財の修理に関する科学的・技術的調査研究及びその結果の公表に関する事務をつかさどると規定されている。多種の絵画・彫刻・工芸品は勿論、木造建造物の天井・壁に描かれた絵画、柱・梁・組物等の彩色装飾及び障壁画並びに彫刻の細部から石造建造物の修理に及ぶ極めて広範囲の内容が対象とされている。したがって、化学・物理・生物の各研究室の協力のもとに調査研究が進められる。技術的には修理文化財を、(1)板絵・彩色木工品・漆芸品、(2)紙布に描かれた絵画、(3)土器・陶磁器・金工品・石造物の三種類に概ね分けることができる。調査研究は、現地へ出張する場合と、保存科学部アトリエ内に文化財を移動の上行なう場合とがある。アトリエは文化財修理の病室や治療室・手術室の役目を果して、ここでは徹底した科学的調査研究と、科学的処理を以って周到な修理が可能である。同時に過去の技術の復原と伝統技術の検討がなされる。

A 研究・調査活動の概要

昭和45年度で生物研究室に始めて定員研究職が1名認められ、又、保存科学実験室の改造・模様替と別館竣工によって、大幅に施設が拡充・整備した。海外研究者との関係が深められ、来訪者の講演と相互の意見交換が行なわれて有意義であった。

特別研究の「陳列室並びに収蔵庫の室内温湿度及び汚染空気が美術品に及ぼす影響とその防除についての研究」は、昭和42年度から3ヶ年計画で実施してきたが、昭和45年度1ヶ年を延期し、別館内収蔵庫とその他の室に関し、空気調和と新築コンクリート造との関係を調査した。又奈良国立博物館で開催された正倉院展における陳列ケース内外の保存環境について、温・湿度及び空中菌に関し助言するとともに調査を行い、良好であることを確認した。

万国博覧会美術館の美術展示環境については、前年に引きつづき指導助言を与えて

きたが、現在可能な美術展示環境の造成に努力した。竣工後及び公開以前並びに公開中、下記諸事項に関し、万博美術館の協力を得て測定し、空調運転と照明の調整に助言し必要に応じ基準の設定を助言した。

(1) 温湿度の設定・測定

(2) 気流・塵埃の測定

a) 二酸化窒素・炭化水素・メルカプタン・炭酸ガス・硫酸化物の検出

b) 空中菌の測定

c) 空中の苛性度の測定

d) 入場者数と炭酸ガスの測定

(4) 展示用照明度の測定

(5) テレビ・映画・写真撮影に関する照明の基準設定

受託研究では、前年度に引きつづき加曾利具塚の遺跡保存について行い、合成樹脂と防黴剤を併用して、遺跡の崩壊防止と防黴効果を観察したが、無機物の析出の処理等も加わっており、今後一層装飾総合的な環境造成の研究が必要とされることが痛感された。

九州装飾古墳保存に関し、九大を中心として調査研究会が文化庁の要請によって組織され、これに協力して玄室内彩色壁画の顔料分析と石質の調査を分担し、又玄室内空中菌の採取と同定を行った。

他方、腐朽に原因する破損度の高い建造物部材及び細部刳型、彫刻を廃棄することなく、再使用するための試験研究として、歎喜院の手挟（刳型・彫刻）の特殊合成樹脂の充填・補加による整形を行った。更にこの方法を拡大して、別館の新アトリエを利用し、旧富貴寺塔婆部材について、柱・台輪・斗拱・丸桁等大量処理を実施した。従来不可能視されてきた木材腐朽の著しい部材の保存が初めて可能となったことは特記される。これらの部材は、単層宝形造屋根の小堂として、法隆寺に今春組み立てられる予定である。

東京国立博物館構内庭園に雨露にさらされている江戸時代の鉄灯籠が著しい錆を生じ保存上その防止が必要とされたので、解体の上錆の進行程度に応じて、合成樹脂の処理を行い、再び庭園に組立てた。更に今後の保存状況と合成樹脂の効果とを観察する。

V 研究活動及び事業

次いで、大阪府和泉黄金塚古墳出土の鉄器に、ここ2,3年で錆による崩壊の進行が見られたので、東京国立博物館の依頼によって合成樹脂の減圧含浸を実施した。これら一連の研究で腐朽木材を錆化鉄器処理の標本を提供することができた。

B 研究 題 目

岩 崎 友 吉 (化学研究室長)

〔Ⅰ〕 出土木製品の保存処置に関する研究 (44~45) (共)

〔Ⅱ〕 古材の再使用のための化学処置に関する研究 (共)

〔Ⅲ〕 石造文化財の保存処置に関する研究 (共)

〔Ⅳ〕 遺跡の保存処置に関する研究 (共)

〔Ⅴ〕 古代ガラスの研究

〔Ⅵ〕 和紙および表具技術の研究

〔Ⅶ〕 文化財の科学的保存技術の国際的比較

樋 口 清 治 (化学研究室)

〔Ⅰ〕 木造建造物修理における合成樹脂の利用に関する研究 (共)

腐朽、虫蝕などで廃棄材とされるような部材を、合成樹脂の含浸強化と欠損部に樹脂を補填、整形することで建造物として再用させる。

〔Ⅱ〕 出土鉄製品保存処置の研究

合成樹脂の減圧含浸により、錆で崩れた鉄製品を強化、防錆し、考古学的復原をする。

〔Ⅲ〕 剥落どめ用の合成樹脂の研究

剝離層の比較的厚い剝落どめには、従来のP.V.Aやブチラルでは好結果が得られないので、新しいタイプの合成樹脂を研究して利用する。

〔Ⅳ〕 遺跡保存処置に関する研究 (共)

遺構表面、貝塚断面の崩壊防止のための合成樹脂処置を実験的に研究する。

〔Ⅴ〕 石造文化財の保存処置に関する研究 (共)

〔Ⅵ〕 出土遺物のとりあげ方法の研究

出土人骨など崩壊し易いものを、表面を防護強化した状態で、そのままとり

あげる技術的研究。

門 倉 武 夫 (化学研究室)

〔Ⅰ〕 空気汚染が文化財に及ぼす影響についての研究 (共)

文化財に及ぼす影響を究明するため各地の文化財環境空気中の炭化水素、イオウ酸化物、窒素酸化物、炭酸ガス、塵埃などの汚染因子をガスクロマトグラフィー、アルカリ濾紙法、その他により測定し、汚染の成因、挙動、経年変化等について検討する。

空気中の硫化水素、メルカプタンの測定法の検討及び汚染度の調査。

〔Ⅱ〕 陳列室ならびに収蔵庫内の温湿度及び汚染空気が文化財に及ぼす影響とその防除 (共) 特別研究

〔Ⅲ〕 文化財の研究に対する CHN 元素分析計の応用研究。

基礎資料を得るため、漆、膠等の試料に対し、分析的実験を行う。

登 石 健 三 (物理研究室長)

〔Ⅰ〕 コンクリートより発散される苛性粒子の研究。

存否のテスト法、粒子の寿命・安定性などに関する基礎的な性質の研究を行ない続行中。

〔Ⅱ〕 鎌倉大仏の変形に関する研究

約 100 年前のものと思われる写真をもとにその撮影点をさがし、同一比形の写像を撮影、これからこの 100 年間に僅かな頭部の前傾があったかという結果を得た。

〔Ⅲ〕 ジェット輸送中の荷物室温湿度圧力変化の測定。

乾電池を電源とし、これらを自記記録する装置を組立中。

〔Ⅳ〕 展示施設・収蔵・施設内の保存環境

特別研究「陳列室ならびに収蔵庫内の温湿度および汚染空気が美術品に及ぼす影響」による調査研究も含む。

〔Ⅴ〕 X線 γ 線による文化財内部構造・欠陥等の透視研究

仏像・工芸品・出土品・絵画等で材質はキャンバス・木・漆・金属等を含む

V 研究活動及び事業

各種の文化財の内部構造・欠陥の調査研究であり、この期間には特に国宝如庵の移転に伴う壁体および木材の内部透視調査研究を行なった。

〔Ⅵ〕 湿度計誤差発生について

特にアスマン湿度計における誤差発生の原因を研究中

見 城 敬 子（物理研究室）

〔Ⅰ〕 温湿度による文化財の材質への影響と保存法（43～45，共）

紙，漆塗膜を各温湿度に放置した際の物性変化，木，紙に塗布されている顔料と膠および油絵に使用されているアマニ油を顔料の各温湿度中における物性の経時変化を測定する。

〔Ⅱ〕 光による文化財の材質の劣化とその防止に関する研究（43～45，共）

〔Ⅰ〕に光を照射させて，それらの劣化を経時的に測定し，その原因を追求し，各々の材質に適する保存法を研究中。

〔Ⅲ〕 着色漆塗膜に関する研究（44～45）

顔料を漆塗膜の各硬化段階で添加，種々の温湿度の下で好条件を見出す。

〔Ⅳ〕 古代漆塗膜並びに油絵の赤外線吸収スペクトルによる研究。

〔Ⅴ〕 陳列室並びに収蔵庫内の温湿度および汚染空気が美術品に及ぼす影響とその防除についての研究。（共）特別研究

石 川 陸 郎（物理研究室）

〔Ⅰ〕 鎌倉大仏の変形に関する研究。

明治初期の写真をもとに建立から現在までの変形状態及び原因究明。

〔Ⅱ〕 青銅美術品（青銅器時代）の製作技法に関する研究。

主にイラン・イラクデラマン地方の発掘品についての製作技法についての調査研究。

〔Ⅲ〕 X線 γ 線による文化財内部構造・欠陥等の透視研究。

医学におけるレントゲン透視と同様に文化財内部の様相を知って製作技法，修理状況，構造上の欠陥などを知る。

〔Ⅳ〕 立体文化財の模型製作法。

脆弱な立体文化財の等高線正射投影写真法による実測図からの模型製作法の開発続行中。

- 〔Ⅴ〕 陳列室ならびに収蔵庫内の温湿度および汚染空気が美術品に及ぼす影響。(共)
特別研究

江 本 義 数(生物研究室) 研究員(非)

- 〔Ⅰ〕 国宝、重要文化財の虫害調査と防除。
(1) 空中微生物の採取、その培養と種の決定。
(2) 美術品に発生した菌の培養、防除と美術品の保存方法。
(3) 遺跡及び出土物の虫害、防除と保存。
〔Ⅱ〕 菌類の分類と菌株保存。
収蔵庫、絵画等から採取した菌の分類と保存。
〔Ⅲ〕 展示室及び収蔵庫内の温湿度と菌の関係。

新 井 英 夫(生物研究室)

- 〔Ⅰ〕 文化財劣化の微生物学的研究。
劣化を受けた文化財からの微生物分離ならびにこれら微生物の温湿度についての生育限界を研究。
〔Ⅱ〕 文化財の生物汚染防除に関する研究。
生物汚染を受けた文化財のガス滅菌・殺虫処置に必要な滅菌条件設定のための基礎的研究。

中 里 寿 克(修理技術研究室)

- 〔Ⅰ〕 文化財の伝統的技法の調査及び記録作製。
文化財の修理保存の前提となる技法と施工工程を究明し体系化する。材質及び破損原因の究明も行う。
〔Ⅱ〕 X線透視による平安鎌倉時代漆芸技法の研究。
主に平安鎌倉時代の漆芸についてX線と顕微鏡を用い、材質、構造、施工法の調査研究を行い、合せて実測図を作る。

V 研究活動及び事業

〔Ⅲ〕 古代漆芸品の技法研究。

縄文、弥生、古墳時代の漆芸品の材質技法，施工工程を研究する。

茂 木 曙（修理技術研究室）

〔Ⅰ〕 文化財の科学的保存技術の研究。

建造物の部材と，それに付随する建築彩色や板絵，彫刻等の彩色の合成樹脂による剝落どめの技術的研究。

〔Ⅱ〕 受託研究による文化財の科学的保存処置のための技術研究。（共）

研究を依頼されたものの中から，実施のため必要な技術的研究。

江 本 義 理（主任研究官）

〔Ⅰ〕 文化財の材質に関する研究。

非破壊的分析法および微量試料による分析法の検討とその感度・精度の向上に関する研究。X線分析法・赤外線分析・熱分析などによる材質の判定，変質・劣化および技法に関する研究。

〔Ⅱ〕 考古遺物・遺跡に関する考古化学的研究。

遺物の材質研究ばかりでなく，埋蔵環境と埋蔵時，出土後の遺物の変質との関連，遺物の変質・劣化の機構や過程をさび，析出物などから究明する。

〔Ⅲ〕 空気汚染の文化財に及ぼす影響に関する研究。（共）

ガスクロマトグラフィーなどによる汚染因子の究明とアルカリ濾紙法などによる汚染度の測定，金属板試片の大気腐食度による影響の判定と汚染因子の防除法，並びに陳列室や収蔵庫内外の保存環境調査。

C 研究・調査活動（昭45・1～昭46・3）

岩 崎 友 吉（化学研究室長）

加曽利貝塚保存処置続行中。

出土鉄器の処置の研究。

ローマセンター理事会出席，修理技術者の水準について協議。

宮崎県立博物館鉄器保存処置指導。

熊本県千金甲古墳汚損調査。

熊本県横山古墳彩色石材保存処置。

京都国立博物館千仏多宝幢保存処置調査。

如庵保存処置予備調査。

旧富貴寺塔婆初重遺材保存処置。

七廻り鏡塚出土品保存処置続行中。

樋口清治（化学研究室）

昭和45年3月より同年8月まで国宝浄土寺阿弥陀三尊像の漆箔の剝落どめ修理の際、美術院国宝修理所に協力して、従来困難視されていた厚い漆箔の剝落どめに、水溶性アクリル樹脂と、2液混合による増粘性の特殊エマルションの応用を工夫成功した。

昭和45年9月より46年3月まで受託研究として旧富貴寺塔婆初重遺材の科学処置に参加した。これは腐朽木材の強化にイソシアネート系合成樹脂の含浸を初めておこない、また欠失部の補填、整形にはアルダイトS V 426の他に、表面仕上げ用としてマイクロバルン、顔料、チオコール変性エポキシ樹脂を一定割合に調合して使用し、更に色調を整えるため古色づけをおこなった。この結果従来は廃棄材となる古材を再利用することが出来た。

昭和45年9月より46年3月の間和泉黄金塚古墳出土鉄器一括の保存処置を、東京国立博物館の依頼により指導した。このとき従来の方法を更に改良した防錆用エマルションの減圧含浸を試み、更に欠損部の補填にマイクロバルンとセメダインCの混合物で整形することで、出土鉄品の保存法を更に進歩させる成果があった。

昭和45年3月中里技官と共同で、東京国立博物館裏庭に在る江戸期の鉄灯籠の保存処置をおこない、屋外におかれた鉄製品保存の問題として合成樹脂処置法を検討した。

昭和45年9月石川県明泉寺石造塔婆修理の際、エチルシリケート、エポキシ樹脂の樹脂加工を指導した。

昭和45年3月に岡山市に於いて人骨3体の採り上げを指導した。

門倉武夫（化学研究室）

V 研究活動及び事業

万国博美術館において展示環境調査のため45年3月（会期前）と45年8月（会期中）に展示場内外の空気試料を採取し、環境空気中の汚染因子をガスクロマトグラフィーにより分析した。又、会期中同展示場内外のイオウ酸化物についてアルカリ沝紙法により汚染度を測定し、濃度変化を監視した。

特別研究に関しては、奈良国立博物館において開催された正倉院展の展示環境を調査するため45年9月と10月（会期前及び会期中）に計3回現地にて空気試料を採取し、展示場内外及びケース内の炭化水素、炭酸ガス、塵埃等の測定を行った。

又、同期間中、展示場内外のイオウ酸化物、窒素酸化物についてアルカリ沝紙法により汚染度を測定した。

前年度に引続き、文化財環境空気中のイオウ酸化物、窒素酸化物の経年度変化を検討するため、京都国立博物館、平等院、箱根美術館、三溪園、高德院、根津美術館等でアルカリ沝紙法による空気汚染度を測定した。

文化財の材質研究に対する CHN 元素分析計の応用性を検討する目的で漆、膠、絹等を分析した。

登 石 健 三（物理研究室長）

特別研究に関し当研究所新設別館、奈良国立博物館陳列室等について研究を指導し総括した。日本万国博が昭和45年3月から半年にわたり開催されたが、万博美術館の保全に参加、会期前より後に亘り打合せと測定とのため数回現地に出向いた。万博ではこのほかタイムカプセルの企画にも技術委員として参加している。

地方博物館の館内環境調査を度々行なった。特に新設施設の開館時には保存環境が悪いので開館前の検査を依頼されたところが多い。神奈川県立博物館・兵庫県立近代美術館・神戸港湾博物館・佐賀県立博物館・福島県歴史資料館・愛媛県立美術館・安土資料館・奈良国立博物館・千葉県立上総博物館などで、このほか熊本県立博物館・埼玉県立博物館も建設準備のための諮問をうけ出向いている。

鎌倉大仏の昔の写真につきその撮影位置をさがす仕事は中々手間をとり、昭和45年度中は前後4回出張して、やっとその位置をつかむことが出来た。

X線撮影のため地方に出張することは比較的少ない方であったが、横浜市称名寺と神奈川県大磯町の国宝茶室如庵の調査とを行なった。如庵は移転方法決定の材料とな

るべき壁体の構造・木材の腐朽を知るための調査で、前後2回に亘り約120枚の撮影を行なった。このほか西洋美術館で油彩画の透視調査を行なっている。

東京及び京都国立博物館で開催されるソ連名品百選展ではアイコンの保全に協力、調湿ゲルによる湿度変化緩和法を応用した。

見 城 敏 子 (物理研究室)

特別研究に関し昭和44年9月、10月に正倉院展の為に奈良国立博物館の陳列ケース内外の温湿度、苛性粒子による偏共度を測定した。また万国博覧会の会場内に顔料を放置して、CO₂による変退色を測定した。

石 川 陸 郎 (物理研究室)

鎌倉大仏の変形について明治初年の写真をもとに現在の大仏との比較及び原因追求を行う。

青銅美術品についてはテラマン地方の発掘品に対し鍛造か鑄造かの判定及び鉄器時代への技法的関連についての研究を行う。

X線γ線についての調査では国宝如庵の解体移築について解体前の構造及び腐朽状態を現地大磯にて45年12月・46年1月の2回にわたり調査を行った。また受託研究の一環として旧富貴寺塔婆初重遺材の調査も行なった。

特別研究の一環として45年9月3日～5日正倉院展（奈良国立博物館開催）会場の温湿度及びその他諸測定を行なった。

江 本 義 数 (生物研究室) 研究員(非)

福岡県王塚古墳内に発生した糸状菌の研究。

資料を得て菌類の分離、培養を行なった (45.2)

万国博覧会美術館内の空中菌の研究。

2回出張。第1回は開会前 (45.3)、第2回は開期中 (45.8)。後者1は開館前、中、後の3回実施。菌数は比較的僅少であった。

大阪四天王寺蔵漆皮箱の微害調査。

寺宝の漆皮箱が亀裂を生じ、カビの発生が見られた。その原因としてカビが内部に

V 研究活動及び事業

入り亀裂となったと考えられたが、実は某会に展示したため乾燥して亀裂を生じ、返還後土蔵に格納したため湿気を受けてカビの発生となったと考えられた。(45.3)
千葉県千葉市加曽利貝塚の徴害とその防除。

前年に続いて防除の効果が見られたので、現在継続中である。

奈良国立博物館内空中菌の研究。

特別研究の一環として正倉院展に関連しての調査で奈良国立博物館に2回出張。第1回は平常の展示中。第2回は同展開催中に行なった。採取し得た菌数の殆どは文化財に有害と考えられるので注意をした。(45.10)

奈良平城宮跡覆屋内発生の蘚類とその防除。

同覆屋内土面にコケ類の発生が見られていたが、1部分に防除剤を施し、その結果を見ている。現在継続中。(45.10)

埼玉県上尾運動公園博物館陳列品の徴害調査。

同館陳列品の内、国体、オリンピック競技会に着用したコート等に発生した菌類につきその防除を指導、統行中である。(45.12)

新井英夫(生物研究室)

奈良博物館正倉院展にともなう大気中の微生物調査。(45.10)

特別研究の一環として正倉院展前と開期中およびケース内について調査した。

千葉県加曽利貝塚に発生する微生物調査(45.9, 46.2)

表面に発生する白色物質の関連で調査した。如庵移築に際し、微生物による劣化ならびに虫害調査(45.12, 46.1)

壁面と構造について調査した。

中里寿克(修理技術研究室)

漆芸品の調査

国宝蝶螺鈿蒔絵手箱(畠山美術館蔵)、国宝円相文蒔絵経箱(西大寺蔵)、重文孔雀鎗金経箱(浄土寺蔵)をX線透視して構造、材質、蒔絵技法等を調査。平文技法の調査として、国宝東大寺鎮壇具の内金鈿装大刀三口、重文錫平文鉦架(東大寺)、重文錫平文唐櫛笥(松永記念館蔵)、重文平文麻笥(大東家蔵)、等を調査。

古代漆芸品の調査と保存処置。

重美乾漆大鑑（大倉集古館蔵）、国宝山科西野山古墳出土品（京大）の内乾漆断片を調査。又、宮城県山王遺跡出土の籃胎櫛の保存処置を行い（45.1～2）それに関して東博蔵漆塗櫛6点を調査した。

鉄器の保存処置と調査、

東博蔵鉄灯籠について合成樹脂による防錆処置及強化処置を試み、合せて錆化状態について調査。（45.1～4）

建造物の保存処置と調査。

受託研究として兵庫県歓喜院聖天堂の手狭について合成樹脂による保存処置を実施し記録作製を行い、（45.3～5）その後旧富貴寺塔婆初重遺材の腐朽材について合成樹脂による強化充填処置を実施し、記録作製を行なった（45.6～46.3）

絵画の保存処置。

京都清水寺の末吉船絵馬について、汚染状態を調査記録し、和紙水貼り法による汚染物質洗滌処置を試みた。（45.1）

茂 木 曙（修理技術研究室）

国宝石山寺多宝塔内部巻柱の彩色を対象に合成樹脂による彩色保存のための技術的研究の継続を行なった。（45.1～3）

日光輪王寺大猷院本殿内部板絵の合成樹脂による保存処置の技術指導のため現地調査を行ない実施上の諸問題を研究中。

受託研究による旧富貴寺塔婆初重遺材の科学的保存処置の基礎設計に資するため、207箇に及ぶ古材の分類、実測、重量測定、比重等から各部材の標準体積と、実体積の測定を行なった。それらの関係から腐朽、欠損部分の容積を算出し、各種合成樹脂の含滲、充填、補填などに要する樹脂量の算定、技術補助員の人数及び日数、必要器材の選定などの基とした。実施に際しての技術的諸問題について協力した。

江 本 義 理（主任研究官）

材質研究——従来の螢光線分析装置を改良開発して可搬式の装置を新たに設備し、日光東照宮陽明門天井板絵を現地で調査し、彩色顔料の分析を非破壊的に行なった。

V 研究活動及び事業

(45.6) また、同装置により奈良薬師寺蔵慈恩大師像の彩色顔料についても分析を行った。この装置により、X線分析による材質研究の行動範囲が広がり、今後の調査、データ収集に大きな期待が持てるようになった。

装飾古墳保存対策研究会の研究を分担し、44年度に引き続き、福岡県王塚古墳の壁画、石材の老化に関し現地調査を行ない、彩色顔料の材質、石材の変質について分析、カラー顕微鏡等の撮影、考古化学的見地からも検討した。(45.2, 12, 46.2, 3)

東大イラク、イラン調査団の銅器34点(45.8) 中国青銅器、鏡などの材質研究、石造品の変質に関して調査を行った。(45.9, 46.3)

考古化学——加曾利貝塚住居跡、貝層断面に発生する白色析出物の分析、発生機構の調査(45.6, 9, 46.2) 平城宮跡(45.2.11) 群馬県観音山古墳(45.9, 46.2) 京大考古資料館所蔵の出土青銅器、鉄器などの材質や変質による生成物などの分析を行った。

空気汚染の影響および保存環境——万国博美術館の展示、(45.3, 8) 並びに特別研究に関しての正倉院展(於奈良博)(45.1, 11)の環境について、大気腐食、硫酸酸化物、窒素酸化物、炭化水素などの因子の測定により汚染度を調査した。そのほか、主として京都の収蔵庫内外の保存環境調査に参加した。

D 主要研究業績

(①:著書 ②:論文 ③:解説
④:研究発表⑤:講演・放送⑥:その他)
昭45・1~昭46・3

岩 崎 友 吉 (化学研究室長)

- | | | |
|---------------------|-------------------|------|
| ②木製品の保存処置(第2報・共著) | 保存科学 6 | 45・3 |
| ②男体山頂祭祀遺跡出土鉄器の保存処置。 | 保存科学 7 | 46・3 |
| ⑥人文系博物館資料の保存の問題(対談) | 博物館研究 Vol.43 No.1 | 45・1 |
| ⑤保存科学 | 日本博物館協会講習会 | 45・6 |
| ⑤保存科学 | 東京教育大学博物館学講義 | 45・7 |
| ⑤文化財保存研究の分野に於ける国際関係 | 古文化資料自然科学研究会 | 45・9 |
| ⑤埋蔵文化財の科学的保存処置 | 記念物課埋蔵文化財発掘技術者研修会 | 45・7 |

樋口 清 治 (化学研究室)

- ②木製品の保存処置 (第2報・共著) 保存科学 6 45・3
- ②明恵上人紀州遺跡率塔婆保存処置 (共著) 保存科学 7 46・3
- ②東京国立博物館蔵鉄灯籠の保存処置 (共著) 保存科学 7 46・3
- ②男体山頂祭祀遺跡出土鉄器の保存処置 (共著) 保存科学 7 46・3
- ⑤埋蔵文化財の科学的保存処置 記念物課埋蔵文化財発掘技術者研修会 45・7
- ⑤建造物修理に於ける合成樹脂について 建造物課文化財建造物修理技術者講習会 45・9

登石 健 三 (物理研究室長)

- ①古美術品保存の知識 第一法規出版株式会社 45・12
- ②空気湿度変化緩和材としての木材の材種による相違 (共著) 保存科学 6 45・3
- ②漆の固化と湿度の関係 (共著) 保存科学 6 45・3
- ②DAILAMAN IV (共著) 東京大学東洋文化研究所 46・3
- ③文化財保護のための科学 科学朝日 45・1
- ④漆塗膜に関する研究酸化鉄の影響 色材協会・日本化学会共催 45・10
- ⑤保存科学 昭和45年度文化財 (美術工芸品) 管理研究協議会 岡山・高松・福岡 45・6
- ⑥Art and archaeology technical abstracts～抄録報告 AATA Abstracts 45・

見城 敏 子 (物理研究室)

- ②空気温湿度変化緩和材としての木材の材種による相違 (共著) 保存科学 6 45・3
- ②漆の固化と湿度の関係 保存科学 6 45・3
- ②漆塗膜に関する研究 (第1報) 漆塗膜の硬化過程と湿度の影響 色材協会誌 45・6
- ④漆塗膜に関する研究 酸化鉄の影響 色材協会・日本化学会共催 45・10

石川 陸 郎 (物理研究室)

- ②平安時代漆芸資料Ⅳ (共著) 保存科学 6 45・3
- ②宮城県山王遺跡出土辨柄漆塗櫛の技法とその保存処置 (共著) 保存科学 7 46・3

V 研究活動及び事業

②DAILAMAN IV (共著)

東京大学東洋文化研究所 46・3

江 本 義 数 (生物研究室) 研究員(非)

- ②栃木県大平町出土土形木棺中からの黴類 保存科学 6 45・3
- ②福岡県王塚古墳内の糸状菌調査報告 装飾古墳保存対策研究会中間報告 45・12
- ②Gonytrichella, a new genus of Hyphomycetes. 日本菌学会会報Ⅺ, 3. 45・12
(共)
- ②万国博覧会美術館内の空中菌調査報告 万博美術館 46・1
- ②法隆寺金堂再現壁画パネルの被害 保存科学 7 46・3
- ②広島県立美術館内の空中菌 保存科学 7 46・3
- ②奈良国立博物館内の空中菌調査報告 奈良国立博物館 46・3

新 井 英 夫 (生物研究室)

- ②黒麹菌の変異に関する研究 (第5報) 日本醸造協会雑誌 46・4
- ⑥微生物の教材化を促進するための視聴覚教材 (8mmモノクロ, サウンド,
5分) の作製 46・3

中 里 寿 克 (修理技術研究室)

- ②平安時代漆芸技法資料Ⅳ (共著) 保存科学 6 45・3
- ②京都清水寺蔵末吉船絵馬の汚染調査と保存処置 (共著) 保存科学 7 46・3
- ②輪王寺板絵著色神像等の技法と彩色保存処置 (共著) 保存科学 7 46・3
- ②宮城県山王遺跡出土弁柄漆塗櫛の技法とその保存処置 (共著) 保存科学 7 46・3
- ②東京国立博物館蔵鉄灯籠の保存処置 (共著) 保存科学 7 46・3

茂 木 曙 (修理技術研究室)

- ②国宝東福寺三門上層内部彩色保存処置 保存科学 6 45・3
- ②称名寺板絵著色弥勒来迎図, 板絵著色弥勒浄土図彩色保存処置 (共著)
保存科学 7 46・3
- ②国宝浄瑠璃寺三重塔初重内部彩色保存処置 (共著) 保存科学 7 46・3
- ②国宝石山寺多宝塔内部柱彩色保存処置 (共著) 保存科学 7 46・3
- ②日光輪王寺五大明王像彩色保存処置 (共著) 保存科学 7 46・3

江 本 義 理 (主任研究官)

- ②塗装各部・屋根板の材質調査,
山形市立病院済生館本館移築修理工事報告書 44・12
- ③大気汚染による影響 (開発と文化財) 月刊文化財83号 45・8
- ②③金属文化財の材質研究 日本金属学会会報10~1 46・1
- ②京都清水寺蔵末吉船絵馬の汚染調査と保存処置 (共著) 保存科学 7 46・3
- ②宮城県山王遺跡出土弁柄漆塗櫛の技法とその保存処置 (共著) 保存科学 7 36・3
- ②日光男体山出土鉄器および東京国立博物館屋外鉄灯籠のさびの分析並び
に鉄器類の腐食についての考察 保存科学 7 46・3
- ②ガレクティ地区出土銅器類の材質調査 (分担執筆) DAILAMAN (東大
東洋文化研究所) 46・3
- ⑤保存科学 (特に防腐・防虫・防錆) 第5回 文化財建造物修理技術者講習会 45・9

E 科学研究費題目

(Ⅱ予算2科学研究費補助金交付決定額の項参照)

F 受託研究

〔Ⅰ〕重要文化財歎喜院聖天堂手狭保存処置

建造物解体と共に取外された手狭は虫害、腐蝕などによつて内部各所に空洞を生じて、このままでは再度使用することができない。表面の彫刻部分は、損傷は甚だしいけれども比較的その形体を保っているので再度使用可能を目的として、これの合成樹脂含浸、充填などの強化処置法を研究し実施した。

〔Ⅱ〕遺跡ならびに関連出土物の保存等に関する研究

千葉県加曽利貝塚博物館の貝塚断面と住居跡の崩壊防止のための合成樹脂処置は一応終了した。しかし貝塚断面及び住居跡の表面に白化現象を生じ展示効果に支障がある。この白化の原因を生物学的或は分析化学的見地より調査し、この防止対策をたてるとともに、局部的遺構の崩壊を防止する樹脂処置の実験的研究を行なった。

V 研究活動及び事業

〔Ⅲ〕 旧富貴寺塔婆初重遺材の保置処置に関する研究

遺材の腐朽、空洞、欠損などに対する移種目の科学的保存処置に関する研究を行なった。その成果は各部材の強化、充填、整型及び、古材と合成樹脂の組合せによる貼付け、根継ぎ、遺材と新補古材との結合等によって、再使用不可能材と思われたものを多数使用可能材に変えた。この平安古材を主材として、法隆寺境内に単層方形の堂宇が建立される予定である。

2 事業

(1) 出版

A 美術研究

昭和7年1月創刊，昭和46年3月第274号を発行。当研究所美術部の調査研究の成果を公表するための機関誌。主として所属研究員の執筆にかかる論文・研究資料・図版解説・美術関係文献の校刊等を掲載し、ときに所外研究者の寄稿を受けることもある。A4判各号本文42頁，原色図版1，単色図版5，各年度6冊刊行，ただし45年度には8冊刊行した。

昭和45年度（第267号～第274号）「美術研究」の論文題目は次のとおりである。

美術研究 第267号 昭和45年8月

桃山・江戸前・中期の産衣十三領について 上	神谷 栄子
中国初期金銅仏の一考察—特に新資料の二体を中心として—	松原 三郎
住吉広行筆春冬堂上放鷹之図屏風下絵及び「朝鮮信使来聘一件書類」(研究資料)	加藤 秀幸

美術研究 第268号 昭和45年9月

本願寺本三十六人集表紙絵の復元と考察	江上 綏
--------------------	------

美術研究 第269号 昭和45年11月

敦煌本幡画仏伝図考 (上)	上野 アキ
那多佳の生年 (研究資料)	川上 涇

美術研究 第270号 昭和45年11月

狩野 元信 (三)	辻 惟雄
-----------	------

美術研究 第271号 昭和45年12月

狩野 元信 (四)

辻 惟 雄

美術研究 第272号 昭和46年 3 月

石山寺本尊観音菩薩像

猪 川 和 子

桃山・江戸前・中期の産衣十三領について 中

神 谷 栄 子

狩野 元信 (五)

辻 惟 雄

美術研究 第273号 昭和46年 3 月

原家旧蔵伊勢物語絵巻の絵解き

一并びに詞書とその下絵に関する私見一

田 村 悦 子

万 鉄五郎 (四) 一生涯と芸術一

陰 里 鉄 郎

美術研究 第274号 昭和46年 3 月

細見家所蔵愛染明王画像について

関 口 正 之

仏師賢光の十一面観音像について

久 野 健

萩原守衛 (中) 三 一その生涯と芸術一

中 村 伝 三 郎

B 日本美術年鑑

昭和11年10月創刊, 毎年 1 冊 (ただし昭和19年~21年版および昭和22~26年版は各 1 冊) 出版し, 昭和46年 3 月までに29冊を刊行した。内容は, 毎年 1 月から12月までのわが国美術界の活動・情勢を記録するもので, 美術界年史・展覧会・物故者略歴・雑誌単行図書美術文献目録等を収録し, 所内研究員の調査, 執筆による。

C 音盤目録 II (演劇)

昭和41年 3 月刊「音盤目録 I」(義太夫節) に続くもので, 当研究所に所蔵する音盤のうち, 故安原仙三氏旧蔵の音盤 (安原コレクション) の演劇に分類されるもの約 600 枚の分類目録である。付録に音盤カード記入規定, 索引に題名索引・奏演者索引・詞章索引などを付した。本目録は芸能部全員の共同作業による刊行であるが, 本巻は主として演劇研究室員の執筆による。

D 保 存 科 学 第 7 号 昭和46年 3 月

V 研究活動と事業

京都清水寺蔵末吉船絵馬の汚染調査と保存処置

江本 義理・中里 寿克・立田 三朗

日光輪王寺板絵著色神像等の技法と彩色保存処置 中里 寿克・立田 三朗

称名寺板絵著色弥勒来迎図, 板絵著色弥勒浄土図彩色保存処置

茂木 曙・立田 三朗

国宝浄瑠璃寺三重塔初重内部彩色保存処置 茂木 曙・立田 三朗

国宝石山寺多宝塔内部柱彩色保存処置 茂木 曙・立田 三朗

日光輪王寺五大明王像彩色保存処置 茂木 曙・立田 三朗

宮城県山王遺跡出土弁柄塗櫓の技法とその保存処置

中里 寿克・江本 義理・石川 陸郎

日光男体山頂祭祀遺跡出土鉄器の保存処置 樋口 清治・岩崎 友吉

東京国立博物館蔵鉄灯籠の保存処置 中里 寿克・樋口 清治

日光男体山出土鉄器および東京国立博物館屋外鉄灯籠

のさびの分析並びに鉄器類の腐食についての考察 江本 義理

明恵上人紀州遺跡卒塔婆保存処置 樋口 清治・立田 三朗

法隆寺壁画再現パネルの防蝕 江本 義数

広島県立美術館内の空中菌 江本 義数

E その他の出版物

美術部

支那古版画図録	(美術研究資料第1輯)	昭和 7
吉備大臣入唐絵詞	(同 第2輯)	同 9
徽宗摹張萱搗練図	(同 第3輯)	同 10
鳳凰堂雲中供養仏	(同 第4輯)	同 11
桃山時代金碧障壁画	(同 第5輯)	同 12
富貴寺壁画	(同 第6輯)	同 13
印度及南部アジア美術資料	(同 第7輯)	同 14
光悦色紙帖	(同 第8輯)	同 14
菱田春草	(同 第9輯)	同 15

能恵法師絵詞	(同	第10輯)	昭和16
宮素然筆明妃出塞図巻	(同	第11輯)	同 16
日本美術資料		第1輯	同 13
同		第2輯	同 14
同		第3輯	同 15
同		第4輯	同 16
同		第5輯	同 17
近代日本美術資料		第1輯	同 23
同		第2輯	同 24
同		第3輯	同 26
墨跡資料集		第1輯	同 24
同		第2輯	同 24
同		第3輯	同 26
源氏物語絵巻			同 24
黒田清輝素描集			同 24
栄山寺八角堂			同 25
栄山寺八角堂の研究			同 26
法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究			同 28
黒田清輝作品集			同 29
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで		同 16
同	続編 昭和11年～同20年		同 23
東洋古美術文献目録	昭和21年～同25年		同 29
美術研究索引	第1号～第100号		同 16
美術研究総目録	第1号～第230号		同 40
高雄曼荼羅			同 41
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで (再刊)		同 42
日本東洋古美術文献目録	昭和11年～同40年		同 44

ほかに科学研究費補助金(研究成果刊行費)の交付を受け、または本研究所の監修で刊行された図書は次のとおりである。

V 研究活動及び事業

光学的方法による古美術品の研究

東京国立文化財研究所光学研究班編	吉川弘文館	昭和30
梁楷 美術研究所編	便利堂	同 32
醍醐寺五重塔の壁画 高田 修編	吉川弘文館	同 34
平安時代世俗画の研究 秋山光和著	同	同 39
近代日本美術の研究 隈元謙次郎著	大蔵省印刷局	同 39
黒田清輝 同	日本経済新聞社	同 41

芸能部

標準日本舞踊譜	昭和35
音盤目録 I	同 40
芸能の科学—芸能資料集 1—四世鶴屋南北作者年表	同 41
同 —芸能資料集 2—鮫の神楽台本集成	同 41

保存科学部

重要文化財円成寺本堂内陣彩色剥落どめ

(東京国立文化財研究所受託研究報告 保存科学部 第1号) 昭和35

国宝明王院五重塔内部彩色剥落止本作業及び木材の科学的処置

(同 第2号) 同 36

国宝明王院五重塔四天柱塗装処置及び天井板彩色保存処置

(同 第3号) 同 36

国宝西明寺三重塔内部彩色剥落どめ

(同 第4号) 同 36

重要文化財東照宮内部彩色剥落どめ

(同 第5号) 同 36

国宝海住山寺五重塔内陣板絵及び彩色剥落どめ

(同 第6号) 同 37

重要文化財霊山寺三重塔内部彩色剥落どめ等科学処置

(同 第7号) 同 37

重要文化財万福寺木額、柱聯、榜牌等剥落どめ

(同 第8号) 同 38

重要文化財舟屋形内部彩色剥落どめ

(同 第9号) 同 38

国宝興福寺北円堂内部彩色保存処置

(同 第10号) 同 39

国宝崇福寺第一峰門彩色剥落どめ

(同 第11号) 同 39

重要文化財本地堂焼損材補修材料の研究

(同 第12号) 同 40

重要文化財崇福寺三門彩色剥落どめ	(同 第13号)	昭和40
重要文化財般若寺十三重石塔初重軸石剥落止め硬化処置	(同 第14号)	同 40
重要文化財吉野水分神社本殿建築彩色剥落どめ	(同 第15号)	同 40
国宝薬師寺東塔内部彩色剥落どめ	(同 第16号)	同 41
重要文化財千代神社本殿の向拝手挟の保存修理にかかる保存処置	(同 第17号)	同 41
木造神像二軀の科学的保存処置	(同 第18号)	同 42

(2) 公開学術講座

美術部

昭和45年10月31日(土) 13.30~16.30 於日本経済新聞社小ホール

仏伝画の系譜

上野アキ

仏教美術はインドで舍利塔の塔門及び欄楯の荘嚴に始まるが、信仰の弘通と教団の発達に伴ない、民衆教化の手段として広く行なわれるようになった。仏伝図は釈迦の一代の業績という極めて平明な画題で早く登場し、最初は仏陀を表現しない仏伝図が製作されたが、紀元2世紀頃仏像が出現して、以後仏教の伝播とともに広くアジア諸地域に浸透した。今日伝わる仏伝図遺品は初期のインドの作品のほか、ジャワのボロブドゥールに方広大莊嚴經によって克明に刻出した竜大な浮彫があり、雲岡には簡略な連続場面の遺品がある。これらが釈迦の涅槃以前の主題に限られるのに対し、キジルの700年頃の壁画が涅槃以後の事柄に関するものの多いことは、教義的な違いを示したものであり、又中国中原で早く姿を消した仏伝図が、9世紀をピークとして敦煌ではなお画き続けられていたことは、地域的な好みと伝統の根強さを示すものと考えられる。以上の内容をその他の例をも加えてスライドによって説明した。

説話絵巻の展開

宮次男

日本の説話絵巻は、奈良時代に唐画にもとづいて製作された絵因果經以来の伝統がある。一方、平安時代後期に活発となつた説話への関心は、諸種の説話集の編纂ともなつて、説話絵巻を製作した。しかし、これら説話絵巻の構成は絵因果經のそれともいささか異るところがある。すなわち、同一構図の反復描写を特色とするもので、信

貴山縁起、粉河寺縁起、吉備大臣入唐絵、彦火火出見尊絵、華嚴宗祖師絵伝などにみられるものである。この特色は、敦煌発見の牢度叉闍聖変画巻にも窺われるところで、彼我の絵画遺品にみるこのような共通形式は、その相関性を予想させるが、唐代の変文の日本説話絵巻への直接的な影響を立証する根拠はいまだ見い出されていない。ともかく、日本の説話絵巻は、奈良時代以来の絵因果経に、平安末・鎌倉初期の上記諸作例にみる表現形成が合流して展開するが、単純な同一構図の反復描写は次第に行なわれなくなり、変化に富む画面構成をとるようになる。また、画面は単に詞書の挿絵にとどまらず、絵自体のもつ説話性によって、真の説話絵巻を形成するのである。その意味で、伴大納言絵巻は高く評価されなければならない。しかし、このような説話絵巻も、鎌倉時代中期・13世紀中頃以後の作品になると絵自体のもつ説話性は薄れて、挿絵性が強くなり、新しい観照方式にもとづいて製作されるようになる。

芸能部

昭和45年12月10日 朝日講堂

「歌舞伎の技法」

1 陰囃子の道一組み立てと技法—

横道 万里雄

歌舞伎音楽の概観・歌舞伎脚本の構成より説き始め、科白等の分類、陰囃子譜本の現状、陰囃子の楽器について述べた後、陰囃子の曲それぞれの機能、細部構造の変異の幅等を説明し、演奏技法の概要と研究方法について説き及んだ。なお説明には録音テープを使用した。

2 せりふ百態—そのメリハリとノリ—

浦山 政雄

実演 市川 門之助

まず歌舞伎における「せりふ」の起原を探り、おびたしい数に上る「せりふ尽し」の刊行、特に「鸚鵡石」などを例示した。次にせりふの通行名称による種類を挙げ、せりふの技法を、メリハリとノリ、音楽との関係、時代と世話の別、特定の用途、役柄の別、感情表現、発声法などより分類し、故名優のせりふ回しの実例を挙げて解説した。最後に、市川門之助の女形のせりふの実演をまじえての芸談により、せりふの重要性を強調した。

(3) 開所記念行事

昭和45年度（美術・芸能・保存科学3部合同）

昭和45年11月28日（土）13,30～16,00, 東京国立博物館大講堂において「東国の文化財に関する講演と映画の会」を開催した。

1. 東国の彫刻

美術部第一研究室長 久野 健

いにしえの東国とは、大体中部地方以東の地をさしている場合が多い。古代における東国の彫刻は、近畿以西の古彫刻とは違った特異性をもっている点が第二次大戦後次第に分ってきた。この特異性は、7,8世紀の彫刻ではまだはっきりしないが、9世紀にはいると、その早い時期から明瞭にあらわれる。ことに岩手県に遺る9世紀の彫刻には、その遅しさにおいて、東国の彫刻の特徴を十分に発揮している。また、10世紀頃からは、関東地方を中心として鈍彫という、像の表面に丸ノミのあとを、ごつごつと残した彫刻が盛んに作られるようになり、その分布は、知多半島と富山県の高岡を結ぶ線より東に限られ、北は岩手県にまで及んでいる。この男性的で遅しい東国彫刻の伝統は、運慶の彫刻様式の成立とも関係深い点が最近次第に注目されるようになった。

2. 東国の芸能

郷土芸能研究室長 三隅 治雄

東国——特に東北地方の芸能について述べる。東北は夷狄の国とよばれ、その低い文化性をさげすまれる時があったが、事実の中古以来、延年、舞楽等の寺院芸能が栄え、中世近世にかけては神楽・念仏踊、風流踊等の芸能が庶民の生活のなかでゆたかにみのった。今日東北は芸能の宝庫とうたわれるが、そうした現象がなぜ生じたか。不毛の地に芸能の芽を育てたのはだれの力か。東北の芸能の伝承の径路を、スライドをもちいながら説明した。

3. 中尊寺金色堂の保存

保存科学部長事務取扱 関野 克

金色堂は全解体され、内陣漆芸部材は昭和39年3月に保存科学部のアトリエに移され、各研究室が科学的調査と修復に協力した。各部材は現地に戻された後空調設備の整った新覆堂内に組み立てられ、昭和43年5月1日に竣工した過程を説明し記録映画「よみがえる金色堂」を上映した。

(4) 国際国内関係

美術部

国際関係としては美術の出版物、研究資料など各国との交換が盛んに行なわれ、また外国の研究者で当部研究員の指導ないしは資料を利用し研究する者も多かった。海外における調査研究などについては、田実資料室員が外来染織工芸事情調査のため北欧を主として4月に出張し、川上資料室長、戸田第一研究室員が6月台北国立故宮博物院主催「中国古画討論会」に参加し、戸田は元画に関する研究発表をなした。岡第二研究室長は19世紀ヨーロッパ美術と日本近代美術との影響関係調査のため文部省在外研究員として45年11月より46年2月まで西欧10ヶ国に出張した。坂本第二研究室員はバリ国立図書館所蔵版画の調査整理及び東西美術交流史に関する調査研究のため46年2月より1ヶ年の予定にてフランス、イタリア、ポルトガル、スペインに赴いた。

国内における活動については前記各項に記されている如くであるが、学会関係として特に美術史学会、美学会などと接触を密にし、多くの寄与をなした。

芸能部

国際関係としては、各国大学・図書館などより芸能部の出版物との交換依頼を受けている。

国内における関係学会としては、部員は各専門別に、芸能学会・芸能史研究会・中世文学会・東洋音楽学会・日本演劇学会・日本歌謡学会・日本近世文学会などに参加し、それぞれの学会に参与・理事・委員・幹事などとして寄与している。

三隅治雄郷土芸能研究室長は、日本万国博の芸能関係催物に参加、制作・演出を担当した。

保存科学部

I 国際関係

万国博覧会美術展示関係でカナダ国立博物館保存科学研究部長のストロー氏が2月に来所した。氏はモントリオール万国博覧会美術館の展示環境の責任者で意見の交換を行い、油絵の組成と材質に関する微細かつ高度な研究の講演を得た。

3月から4月にかけて、デンマークの国立博物館保存科学部長のクリステンセン氏を、文化庁が招待した。木製埋蔵文化財の保存科学的処置に関し、又金属の保存につ

いて、氏は保存科学部で講演と意見交換を行い有益であつた。

9月に京都・奈良の保存に関するシンポジウムが開催された時、来日したユネスコのローマ・センター会長のブレンダリス氏（英）、並びにイコモス会長のガゾーラ氏（伊）の来訪を受け、新築された別館の視察を得、今後の国際交流についての知見を得た。

又、同月に中華民国の国立故宫博物院訪日団一行6名の来訪を受けた。

10月には、アメリカのフリーア・ギャラリーのゲッテンス氏が来所した。氏は銅器の分析の世界的権威であるので講演を願い、意見の交換を行った。

12月に英国のテイト・ギャラリーのスラブチンスキー氏が来所した。

ローマ・センターの理事会が開催され、岩崎化学研究室長は、5月26日～6月12日の間イタリア・フランスに出張した。

Ⅱ 国内関係

万国博覧会が4月15日から9月13日まで開催され、美術館展示に関し、昨年に引きつづき関野所長は美術展示委員会委員として、又登石物理研究室長は専門委員として参加した。

6月文化庁文化財保護部主催の文化財管理研究協議会に、登石物理研究室長は講師として出席のため岡山・高松・福岡に出張した。

7月奈良で文化庁開催の発掘技術者研修会に、岩崎化学研究室長と、樋口研究員が講師に委嘱されそれぞれ現地に出張した。

昭和46年3月4日、別館会議室で、文化財保存科学懇談会を開催し、文化庁文化財保護部長、管理課長および保存3課長並びに担当官の出席を得て(1)昭和45年度調査研究の概要、(2)昭和46年度調査研究の予定を説明、(3)ローマ・センター関係を報告した後、(4)昭和46年度特別研究「書院造の障壁画の科学的保存の研究」(5)、遺跡と出土遺物の保存、(6)受託研究、(7)ローマ・センター次回総会について懇談し、特に、(8)文化財保存科学に関する「シンポジウム」開催の計画について意見を交換した。因みに竹島卓一博士編の法隆寺五重塔修理記録映画（4巻）を上映した。

VI 研究施設・設備

1 蔵 書

美術部

東洋古美術・近代日本美術・西洋美術関係を主として、和漢（25,091）洋書（3,468）を合わせて、28,559冊、ほかに美術関係雑誌・売立目録類及び拓本がある。

芸能部

雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書3,176冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第1次）・テアトロ（第1次）・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説等の雑誌、丸本・謡本等の台本も収集している。

保存科学部

古来の伝統的生産及び工芸技術書・技術史、または数少ないそれらの科学的究明を試みたもの、修理報告書・調査報告書、及び化学・物理・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて1,452冊を収集している。

昭和44・45年度の新蔵書数は次のとおりである。

区 分	美 術 部		芸 能 部		保存科学部		計
	和漢書	洋 書	和漢書	洋 書	和漢書	洋 書	
昭和44年度	869 冊	25 冊	302 冊	0 冊	109 冊	57 冊	1,362 冊
昭和45年度	781	37	157	0	140	229	1,344

2 資 料

美術部

主として写真による美術研究資料であるが、その収集の目的は、内外の資料をあまねく収集・整理・保管して、その完璧な収集箇所として美術の研究に資することである。この趣旨に基づいて設立当初から写真撮影による資料の作成をはじめ、印刷物を

整理してこれに加える等その収集につとめている。資料の内容は、日本美術・東洋美術・西洋美術および明治・大正美術に大別し、さらにこれを絵画・彫刻・工芸・建築等に分類整理している。その数は特別大型のものから小型のものまで、約12万余。写真資料のほかに印譜・図版カード等がある。

芸能部

レコード・録音テープ・写真（8ミリ・16ミリシネを含む）等による芸能資料を多数そなえている。レコードには毎年各製作会社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって刊行された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上での貴重な資料となるものである。録音テープ及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、奏演法の解析を中心とした写真・テープ、あるいは各種文書の記録写真なども含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

区 分	レコード	録音テープ		シネフィルム		写 真
		7 型	5 型	8 m/m	16m/m	
44・12月まで	5782枚	865本	262本	99本	3本	多 数
45・1～46・3	27枚	151本	0	0	0	〃
計	5809枚	1016本	262本	99本	3本	〃

3 機 器 ・ 設 備

美術部

光学的研究設備

光学の鑑識法を東洋古美術品の研究に応用することは当研究所において既に戦前から企図されていたが、昭和27年度にはそれまでの予備的研究成果と海外における研究設備を参考とし、科学研究費（機関研究）の交付を受けて本格的な設備を整えるにいたった。その後も技術的な進歩に即応して新規の装置を加え、美術史学の実証的研究

に多大の貢献をしている。現在の主要設備を類別すると次のとおりである。

Ⅰ X線透過撮影装置

- | | |
|------------------------|-----|
| (1) 固定式白色X線装置 (100 KV) | 1 式 |
| (2) 固定式単色X線装置 (80 KV) | 1 式 |
| (対蛍光板, 支持台, 防X線用衝立等) | |

- | | |
|----------------------|-----|
| (3) 可搬式白色X線装置 | 1 式 |
| (4) 可搬式ソフテックス装置 (J型) | 1 式 |
| (5) 携帯用ソフテックス装置 (E型) | 1 台 |

Ⅱ 紫外線照射装置

- | | |
|------------------------------------|-----|
| (1) 固定式照射装置 | 2 台 |
| (2) 可搬式照射装置 (フィリップス紫外線ランプ及び専用トランス) | 2 台 |
| (3) 携帯用紫外線検査器 | 1 台 |

Ⅲ ナトリウムランプ照射装置

2 台

Ⅳ 赤外線暗視装置及び間接撮影装置

- | | |
|--|-----|
| (1) 双眼実体顕微鏡及び写真撮影装置 | 1 式 |
| (2) 新型双眼実体顕微鏡及びカラー顕微鏡写真同時撮影装置 (可動支持台及び携帯用スタンド) | 1 式 |

マイクロ写真関係設備

マイクロ方式による古文化財関係基礎資料の収集調査を目的とし、昭和36・37年度科学研究費(機関研究)により次の設備を整え、研究に活用している。

Ⅰ マイクロ写真撮影装置

1 式

(付自動現像機, プリンター, 引伸機, 乾燥機等)

Ⅱ マイクロ読機 (ルーモ社製)

3 台

Ⅲ リーダープリンター

芸能部

各種伝統芸能の記録及び分析研究のための設備・機器を所有する。

Ⅰ 設備

録音室 (遮音壁を備える)・調整室・視聴室 (舞台を備える)・資料室・図書室

Ⅱ 機器

(1) (44年度までに購入のもの)

ビッチレコーダー	1 台
テープレコーダー	5 台
ビデオコーダー	1 台
16m/m 撮影機	1 台
16m/m 映写機	1 台
8 m/m 撮影機	2 台
8 m/m 映写機	1 台
35m/m 写真機	5 台
35m/m マイクロフィルム解読装置	1 台
16m/m シネフィルム分析装置	1 台

(2) 45年度購入のもの

ステレオ音声調整卓・ソニー社	1 台
テープレコーダー・ソニー社	5 台
スピーカー・三菱	4 台
スタジオ用照明器具・バグナル社	一式

保存科学部

主な研究設備

装 置 名	型式又は性能	製造会社名
恒温恒湿槽	0°~40℃ 20~90石	三 英 製 作 所
サンシャイン ウェザー メーター	WE-SUN-HC	東洋理工工業
真空凍結乾燥装置		加藤万製作所
紙耐揉強度試験機		上 島 製 作 所
光電分光光度計	PEM—2 型	日 立
発光分光分析装置		(当研究所組立)
蛍光X線分析装置	D—4 型	理 学 電 機
可搬式蛍光X線分析装置		マグネ技術セン ター
X線回折装置およびデバイ・シェラーカメラ, ラウエカメラ		理 学 電 機
X線発生装置 (透視写真用)	ウェルテス—250	島 津
〃	医療用愛国号	〃

Ⅵ 研究施設・設備

X線発生装置 (透視写真用)	ソフテックスS-E	小泉製作所
真空蒸着装置	CU-6S	徳田製作所
金属顕微鏡	PMF	オリンパス
生物顕微鏡	LCM bi	千代田光学
〃	RI tr	〃
表面アラサ顕微鏡		ラ イ ツ
Co-60, γ 線線源	3キュリー	
〃	0.2キュリー	
ガイガー・ミュラー計数装置	32 型	科 研
自記分光放射計	SR-1 型	日本分光工業株 式会社
ガスクロマトグラフ	K-53型	日立製作所
(水素イオン化検出器・熱伝導検出器・熱分 解装置付)		
回折格子自記赤外分光光度計	IR-G型	日本分光工業
〃 赤外顕微鏡	IMP-3 型	〃
引張試験機	5 kg MK S 型	丸菱科学製作所
自記分光光度計	EPS-3 T	日立製作所
自動記録式示差熱天秤	TGD-C 4	アグネ技術セン ター
炭素・水素・窒素分析計	CHN-026	日立製作所
減圧含浸装置		共和真空 K. K.
減圧殺虫装置	SK 式 2 号	特殊理化興業KK

文化財の特殊性として、材質の劣化現象究明のための試験機類、非破壊的方法による材質調査のための分析機器類、及び微量試料の分析、調査などに用いる顕微鏡類などがある。

4 黒田記念室

この記念室は、本研究所の創立者故帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられたもので、その油絵・素描・画架等を陳列している。

収蔵されているものは、油絵125点・素描170点・スケッチブック等若干である。これらは創立当時主として黒田家から寄贈されたものであるが、その後、樺山愛輔・黒田照子・田中良氏等からの寄贈もふくまれており、随時陳列替を行なっている。毎週木曜日午後1時から4時まで一般に無料公開している。陳列品の主なものは、「知感

情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」等である。

黒田子爵記念室観覧規程

第1条 本研究所の黒田子爵記念室（以下単に「記念室」という。）は、この規程によって一般に公開する。

第2条 観覧は無料とする。

第3条 観覧者は、備付けの帳簿に現住所、氏名を記載し、掛員の指示を受けるものとする。

第4条 陳列品の模写又は写真撮影を希望する者は、予め書面により届出で許可を受けなければならない。

第5条 観覧者は、記念室内において左の事項を行ってはならない。

- 一 陳列品に手を触れること。
- 二 インク・墨汁等を使用すること。
- 三 飲食及び喫煙をなすこと。

第6条 観覧者がこの規程に違反し、又記念室公開の趣旨に反する行為があると認めるときは、退場を命ずることがある。

第7条 観覧の日時は毎週木曜日午後1時から同4時までとし、観覧を停止する日は左の通りとする。

祝 日

開所記念日（10月18日）

年末年始（12月25日から翌年1月6日まで）

夏期（7月21日から8月31日まで）

第8条 本研究所において必要があるときは、前条の日時を随時変更することがある。但しこの場合は予め掲示する。

5 観 覧 室

本研究所美術部の図書及び研究資料は主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等に公開している。年間の閲覧者数は、延1,200名程度である。

Ⅶ 職 員

1 現 職 員

昭和46年3月1日現在

所 属	官 職 名	氏 名	入所年月日
庶 務 課	所 長	関 野 克	昭 27・4・1
	課 長	鬼 山 光 義	45・4・1
	課 長 補 佐	音 川 啓 次 郎	41・6・1
	専 門 員	藤 江 金 治	20・8・31
	庶 務 係	羽 田 吉 一	28・3・16
	文 部 事 務 官	松 本 多 賀 子	39・6・16
	警 務 員	友 田 薫	41・2・1
	事 務 補 佐 員	早 川 ツ ル 子	45・4・1
	"	河 原 裕 子	"
	係 長	大 釜 一 也	37・1・16
会 計 係	文 部 事 務 官	本 村 伝 一	34・4・1
	"	角 田 友 子	39・7・16
	作 業 員	高 谷 た ま	39・4・1
	事 務 補 佐 員	高 橋 雄 二	43・10・30
	技 能 補 佐 員	三 次 ヨ シ	45・4・20
	作 業 補 佐 員	大 塚 正 司	44・1・6
	部 長	中 川 千 咲	9・4・18
	主 任 研 究 官	中 村 伝 三 郎	22・10・1
	"	上 野 ア キ	17・11・3
	室 長	久 野 健	20・5・31
美 術 部	文 部 技 官	柳 沢 孝	21・9・30
	"	田 村 悦 子	22・6・16
	"	猪 川 和 子	22・6・27
	"	宮 次 男	30・9・1
	"	戸 田 禎 佑	37・6・1
	研 究 員 (非)	秋 山 光 和	42・2・1
	室 長	岡 畏 三 郎	20・5・15
	文 部 技 官	関 千 代	18・12・15
	"	坂 本 満	33・10・1
	"	陰 里 鉄 郎	41・4・1
第二研究室			

資 料 室	室 長	川 上 涇	21・2・28
	文 部 技 官	田 実 栄 子	23・3・31
	"	永 雄 ミ エ	23・9・3
	"	辻 惟 雄	37・6・1
	"	江 上 綏	38・5・1
	"	関 口 正 之	42・2・1
	専 門 職 員	橋 本 弘 次	21・6・15
	文 部 技 官	市 川 和 正	30・7・1
	"	野 久 保 昌 良	36・10・1
	"	浦 山 政 雄	27・10・1
芸 能 部 演劇研究室	室 長 事 務 取 扱	浦 山 政 雄	
	文 部 技 官	前 嶋 茂 子	39・7・1
	調査研究員 (非)	宮 本 瑞 夫	41・5・1
	室 長	横 道 萬 里 雄	28・3・16
	文 部 技 官	佐 藤 道 子	30・5・16
	調査研究員 (非)	松 本 雍	44・9・1
	室 長	三 隅 治 雄	27・10・1
	調査研究員 (非)	仲 井 幸 二 郎	41・5・1
	部 長 事 務 取 扱	関 野 克 理	27・4・1
	主 任 研 究 官	江 本 義 友 吉	27・4・1
保 存 科 学 部 化学研究室	室 長	岩 崎 清 治 夫	37・11・1
	文 部 技 官	樋 口 武 夫	32・5・1
	"	門 倉 健 三 子	27・10・1
	室 長	登 石 敏 子	29・9・1
	文 部 技 官	見 城 陸 郎	32・4・15
	"	石 川 克 夫	45・9・1
	室 長 (取)	関 野 英 義	33・5・1
	文 部 技 官	新 井 本 義	39・1・1
	調査研究員 (非)	江 野 里 寿	29・7・1
	室 長 (取)	関 野 里 寿	
修 理 技 術 研 究 室	文 部 技 官	中 茂 木	
	"	茂 木	
	"	茂 木	
	"	茂 木	
	"	茂 木	
	"	茂 木	
	"	茂 木	
	"	茂 木	
	"	茂 木	
	"	茂 木	

2 旧 職 員

(1) 昭和45年度

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
庶 務 課	課 長	岩 田 守 夫	44.4~45.4. 1	文化庁へ出向
	技能補佐員	三 次 ヨ シ	45.4~46.3.27	退 職
	警 務 員	友 田 薫	41.2~46.3.30	休 職

(2) 昭和25年度~昭和44年度 (25年 8 月~44年度末)

所 属	官 職 名	氏 名	在 所 期 間
庶務課 (室)	所 長 事 務 代 理	矢 代 幸 雄	27. 4~28.11
	所 長	田 中 一 松	27.10~40. 3
	雇 用 (事務)	山 田 秀 昭	25.10~28. 4
	庁 務 補 助 員	長 沢 ア イ	27. 5~29. 5
	雑 仕	吉 野 茂 七	21.11~29.12
	〃	諸 星 ハ ル	20. 5~29.12
	臨 時 筆 生	藤 森 園 子	29. 6~31.11
	庶 務 係 長	加 藤 輝 之	27.10~34.11
	〃	安 岡 潤	34.11~36.10
	文 部 事 務 官	長 沢 朝 夫	29. 5~36.11
	警 務 係 長	鶴 田 豊 次 郎	29. 4~38. 3
	庶 務 係 長	鬼 山 光 義	36.10~38. 4
	事 務 員	長 沢 道 子	31.12~39. 7
	課 長	小 島 忠 二	26. 5~40. 3
	作 業 員	糟 谷 愛 子	37. 2~40.12
	事 務 員	中 村 圭 子	35.11~40. 1
	警 務 員	鎌 田 幸 四 郎	29. 1~41. 2
	課 長 補 佐	守 谷 安 知	38. 4~41. 6
	文 部 事 務 官	本 間 春 次	40. 4~42. 3
	課 長	野 島 弥 三 郎	41. 4~44. 3
美 術 部	事 務 補 佐 員	横 川 千 代 子	43. 4~44. 3
	研 究 所 文 部 技 官	島 田 修 二 郎	23. 7~26.11
	第 一 研 究 室 文 部 技 官	白 畑 よ し	3. 8~27. 8
	部 長	松 本 栄 一	24. 8~27.10
	第 二 研 究 室 文 部 技 官	河 北 倫 明	18. 1~27.10
	第 一 研 究 室 技 術 員	鈴 木 友 也	28. 1~28. 2

美術部	資料室文部技官	持丸一夫	22・6~29・3
	資料室技術員	山田桂二	29・2~30・2
	第一研究室文部技官	大串純夫	14・4~30・7
	第二研究室技術員	池田涼子	22・6~33・6
	文部技官(併任)	新規矩男	22・10~34・3
	部長	福山敏男	23・5~34・4
	資料室文部技官	小沢健志	26・4~36・3
	第一研究室長	熊谷宣夫	19・10~37・3
	第一研究室長	田沢坦	34・6~37・4
	第一研究室長	伊東卓治	22・5~38・3
	文部技官(併任)	米沢嘉圃	27・10~40・5
	"	吉川逸治	22・10~40・5
	"	河北倫明	28・4~40・5
	第二研究室長	隈元謙次郎	7・6=41・3
	第一研究室長	秋山光	21・10~42・2
	部長	高田修	27・12~44・3
芸能部	部長(併任)	加藤成之	27・10~32・6
	庁務補助員	新井範子	27・10~34・10
	部長(併任)	下総覚三	33・1~37・7
	演劇研究室事務員	玉木清子	34・9~39・6
	演劇研究室研究員(非)	戸部銀作	27・10~40・3
	音楽舞踊研究室研究員(非)	岸辺成雄	27・10~42・3
	郷土芸能研究室研究員(非)	池田弥三郎	27・10~41・3
	演劇研究室研究員(非)	石田百合子	40・4~41・3
	"	阿部順子	40・8~43・9
	音楽舞踊研究室研究員(非)	山路興造	41・5~44・3
保存科学部	臨時筆生	赤岡恒子	26・4~29・7
	庁務補助員	橋本義雄	28・10~32・7
	修理技術研究室長	毛利登	37・10~38・4
	物理研究室研究員(非)	呉屋充庸	29・4~40・3
	修理技術研究室長	立田三朗	37・10~45・1

注：(1)(2)の所屬，官職・転任時を示す。

VIII 関 係 法 規

○文部省設置法（昭和24年法律第146号
最終改正 昭和45年6月1日111号）（抄）

第3節 附属機関

（附属機関）

第36条 第43条に規定するもののほか、文化庁に、次の機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国語研究所

国立文化財研究所

日本芸術院

- 2 前項の機関（日本芸術院を除く。）の長は、文化庁長官の申出により、文部大臣が任命する。

（国立文化財研究所）

第41条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行なう機関とする。

- 2 国立文化財研究所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東 京 都
奈良国立文化財研究所	奈 良 市

- 3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。
- 4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は、文部省令で定める。

○文部省設置法施行規則（昭和28年1月13日文部省令第2号）
（最終改正 昭和45年4月17日第11号）（抄）

第4節 国立文化財研究所

第1款 東京国立文化財研究所

(所長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課及び次の3部を置く。

- 一 美術部
- 二 芸能部
- 三 保存科学部

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 四 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- 五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 六 庁内の取締りに関すること。
- 七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

(美術部の3室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室、第二研究室及び資料室を置く。

- 2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。
- 3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なうとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。
- 4 資料室においては、美術の研究に関する資料の作成、収集、整理、保管、公表及び閲覧並びに光学的方法による美術の研究を行なう。

(芸能部の3室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び郷土芸能研究室を置く。

Ⅷ 関 係 法 規

- 2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 4 郷土芸能研究室においては、郷土芸能及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

（保存科学部の4室及び事務）

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室、生物研究室及び修理技術研究室を置く。

- 2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究（分析化学的調査研究を含む。）を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 5 修理技術研究室においては、文化財の修理に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。

○文部省定員細則（昭和44年5月21日文部省訓令第12号）（抄）
改正 昭和45年4月17日第20号

文部省定員規則（昭和44年文部省令第12号）第2項の規定に基づき、文部省定員細則を次のように定める。

文部省定員細則

- 1 文部省の本省の各内部部局、各国立学校、各所轄機関及び各附属機関別の定員並びに文化庁の各内部部局及び各附属機関別の定員は、次のとおりとする。

文化庁

区 分		定 員	備 考
附属機関	国立文化財研究所	110人	各国立文化財研究所を通じての定員とする。

- 2 各国立大学、各国立高等学校、各国立青年の家、各国立博物館、各国立近代美術

館及び各国立文化財研究所の定員は、国立学校及本省の附属機関にあっては文部大臣、文化庁の附属機関にあっては文化庁長官が、それぞれ、前項に規定する当該国立学校又は附属機関別の定員の範囲内において、別に定める。

○国立博物館等の機関別の定員について（昭和44年5月26日文化庁長官裁定）（抄）
（昭和45年4月17日改正）

文部省定員細則（昭和44年文部省訓令第12号）第2項の規定に基づき、各国立博物館、各国立近代美術館および各国立文化財研究所の機関別の定員を次のとおり定める。

機 関	定 員
東京国立文化財研究所	48人

附 則〔昭和45年4月17日〕

この裁定は、昭和45年4月1日から適用する。

○教育公務員特例法施行令（昭和24年1月12日 政令第6号）（抄）
（最終改正昭和44年6月9日第149号）

（教育公務員以外の者）

第2条 省略

第3条 省略

第3条の2 文部省設置法（昭和24年法律第146号）第14条及び第36条第1項に掲げる機関（日本芸術院を除く。）の長及びその職員のうちもっぱら研究又は教育に従事する者並びに国立養護教諭養成所設置（昭和40年法律第16号）による国立養護教諭養成所の所長、教授、助教授及び助手については、法第4条、第7条、第11条、第12条、第19条、第20条及び第21条中国立大学の学長及び教員に関する部分の規定を準用する。この場合において、これらの規定中「大学管理機関」とあるのは「任命権者」と読み替え、これらの機関の長及びその職員をそれぞれ学長及び職員に準ずる者としてこれらの規定を準用するものとする。

○東京国立文化財研究所部室長会議運営規則

（昭和45年1月23日所長裁定）

第1条 東京国立文化財研究所部室長会議（以下「部室長会議」という。）の運営に

VIII 関 係 法 規

については、この規則の定めるところによる。

第2条 部室長会議は、本研究所の重要事項について協議し、各部課相互の連絡をはかることを目的とする。

第3条 部室長会議は、次の各号にかかげる職員をもって組織する。

- 一 所 長
- 二 各部長
- 三 各室長
- 四 課 長

第4条 部室長会議は所長が招集し、その議長となる。

- 2 所長に事故あるときは、会議出席者の中から互選により議長を定める。
- 3 所長は必要と認める職員を会議に出席させることができる。

第5条 部室長会議は原則として毎月1回開催する。ただし緊急を要する場合は、随時開催することができる。

第6条 部室長会議に関する事務は、庶務課がこれにあたる。

第7条 この規則に定めるものの他、会議の運営に関して必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、昭和45年1月23日から施行する。

○東京国立文化財研究所受託研究取扱規程

(昭和46年3月15日所長裁定)

(趣旨)

第1条 この規程は、東京国立文化財研究所（以下「研究所」という。）における受託研究（外部からの委託を受けて公務として行なう研究で、これに要する経費を委託者が負担するものをいう。）の取扱いに関し必要な事項を定めるものとする。

- 2 受託研究は、研究所の文化財に関する調査研究上有意義であり、かつ本来の調査研究に支障がなく、当該年度の予算額の範囲内において行なうものとする。

(受託の条件)

第2条 受託研究の受入れ条件は、次の各号に掲げるとおりとする。

- (1) 受託研究は、委託者が一方的に中止することはできないこと。

- (2) 受託研究の結果、工業所有権等の権利が生じた場合には、当該権利を無償で使用させ、または譲与することはできないこと。
- (3) 受託研究に要する経費により取得した設備等は、返還しないこと。
- (4) やむを得ない事由により受託研究を中止し、またはその期間を延長する場合においても、研究所は、その責を負わず、また、原則として受託研究に要する経費を委託者に返還しないこと。ただし、特に必要があると認めた場合は、不用となつた経費の額の範囲内において、その全部または一部を返還することがあること。
- (5) 委託者は、受託研究に要する経費を、当該研究の開始前に納付すること。
- 2 所長は、前項に定めるもののほか、必要と認める条件を別に定めることができる。
- 3 委託者が国の機関、政府関係機関または、地方公共団体である場合は、第1項第3号および第5号の条件は、これを付さないことができる。
- 4 委託者は、必要がある場合は、所長の承認を得て、その委託にかかる研究を協力して行なうことができる。

(決定の方法)

第3条 所長は、当該研究を担当する職員、当該職員の所属する室および部の長の意見を徴したうえ受託研究の受入れを決定する。

(受託の申込等)

第4条 受託研究の申込みをしようとする者は、別紙様式による受託研究申込書を所長に提出しなければならない。

- 2 所長は、受託研究の受入れを決定したときは、その旨委託者および研究所分任契約担当官に通知するものとする。
- 3 前項の通知に基づき分任契約担当官は、契約を締結した旨を、所長に通知するものとする。

(研究の中止等)

第5条 受託研究を担当する職員は、当該研究を中止し、または、その期間を延長する必要があると認めたときは、ただちに所属の室および部の長を経て所長に報告し、その指示を受けるものとする。

- 2 所長は、受託研究の遂行上やむを得ない理由があると認めたときは、これを中止し、または、その期間を延長することを決定し、その旨委託者および分任契約担当

VIII 関 係 法 規

官に通知するものとする。

(研究結果の報告等)

第6条 受託研究を担当する職員は、当該研究が完了したときは、その結果を所属の室および部の長を経て所長に報告するものとする。

2 委託者に対する受託研究の結果の報告は、当該研究を担当した職員が前項の報告後行なうものとする。

3 受託研究の成果を公表するときは、所長の承認を得て当該研究を担当した職員が行なうものとする。

附 則

この規程は、昭和46年4月1日から施行する。

〔別紙様式〕

受 託 研 究 申 込 書

昭和 年 月 日

東京国立文化財研究所長 殿

住 所

氏 名（名称・代表者）

印

東京国立文化財研究所受託研究取扱規程第4条第1項の規定により，下記のとおり
受託研究の申し込みをします。

記

1. 研究題目
2. 研究目的および内容
3. 研究に要する経費
4. 研究用資材，器具等の提供
5. その他

昭和46年 9 月16日 印刷
昭和46年 9 月20日 発行

非 売 品

発行者 東京国立文化財研究所
代表者 関 野 克
東京都台東区上野公園 13-27